

〈創作〉

詩劇「ポリーヌ」

原子
修

1 青い世界

鼓の音 虚空をひき裂く

闇がぬるつとすべりこむ

沈黙の渚をなめずる狼のエロティックな遠吠え しだいにたかまり

やがて

暗黒の空いっばいに 巨大な狼の死体が仰向けに浮かぶ

死体からどしゃぶる青い光

遠吠えの変奏としての横笛 するどく鳴る

どつと 華やかな歓声とともに踊りでる女たち

うすい青のコスチュームで裸身をつつみ

キラキラ光る鏡をふりかざして踊り狂い

狼の死体にむかって絶叫

「死んだ狼」

「青い太陽」

青い女1

「(死んだ狼の尾をつかみ) ねえ 牡の狼ちゃんが死ぬとさあ 青ネギのように香ぐわしいペニスちゃんは
どこかでかくれんぼちゃん?」

青い女2

「(哄笑して) 牡の狼ちゃんが死ぬとさあ 体中がペニスちゃん」

青い女たち

「手をうち 足ふみ鳴らし」

死んだ狼ちゃんは 青い青い太陽ちゃん

死んだ狼ちゃんは 青い青いペニスちゃん

死んだ狼ちゃんからどしゃぶる光ちゃんは

青い青い精液ちゃん」

青い女1

「死んだ狼の右後脚をつかみ) じゃあ この右後脚も ペニスちゃん？」

青い女たち

「(どつと笑い) そうよ そうよ 死んだ狼の右後脚は シャベルのように 青くつてつめたーいペニス

ちゃん」

青い女2

「(死んだ狼の右の耳にはげしく接吻し) 好きよ 好きよ 死んだ狼ちゃんの スプーンのようにとんがっ

た右の耳 だーい好きよ(すすり泣き) ああ わたし この耳と結婚して 口から銀いろの星を生んでみ

たーい」

青い女たち

「(手をうって) 夜空の皿に盛られた暗闇のパンをむさぼりたべる星をうめ！」

青い女1

「死んだ狼の牙に左の目をくっつけ」死んだ狼ちゃんの牙は ナイフのように青い青いベニスちゃん
生きているわたしの左の目は 石炭のように黒い黒いヴァギナちゃん ふたりが結婚してうみたいのは
灰いろの 灰いろーの かわいいかわいい 狼の赤ちゃん」

青い女たち

「死んだ狼のそれぞれの部分に 彼女らのそれぞれの部分をつよくおしつけ 快楽の声をたかくあげ」あ

ああああ すごいいいわ 死んだ狼ちゃんって とつてもいいわー（絶叫して 地に失神）」

狼のエロティックな遠吠え ますます高まり ついに 巨大な死体から稲妻の光があふれいで

とどろさわたる雷鳴

吹きすさぶ暴風

高潮する鼓や笛

青い女たち 息をふきかえし 踊り狂う

青い女2

「キラキラ光る星を鏡にかざし」あーら みてよ わたしの口から 星の赤ちゃんがうまれたわ」

青い女たち

「（笑いたて）唾の赤ちゃん……歯糞の赤ちゃん……腐って 甘い 星の赤ちゃん」

青い女1

「（片隅の うち伏す裸身の男を鏡で照らし）ウワーツ（恐怖の声をあげ）わたしの左の目から 毛なしの
肌の 狼の赤ちゃんがうまれたわ……肥つちよの 醜い中年男に身をやつした狼の赤ちゃんが」

青い女たち

「（いっせいに うち伏す男のまわりに駈けより 手中の 山葡萄の実の房 ノネズミ シロツメ草の花

ヤブ鶯 ヤチブキの花 銀いろの星などを ハラハラと 男の上にふりかけ それぞれの手の鏡で照らし
つつ) 水ぶくれの赤ちゃん……脱毛症の赤ちゃん……いやらしい中年のあかちゃん」

鏡をキラキラふりかざし うち伏す男のまわりを踊り狂う青い女たち 口々に叫ぶ

「アマーテ

アマーテ」

吠えたける狼の遠吠え

旋回する青い光

とつぜん刺すように鳴る横笛

地平を蚕食しはじめる赤い光

みるみる食いちぎられる青い光

赤い光に溺死していく世界

一瞬すべて凍結

沈黙

はるかな地平線の絃をつまびく馬の蹄の音といななきと鼻嵐

やがて沈黙

赤い光のスポットがうち伏す裸身の男を不気味に照射し

アメーノの声

「(低く 威嚇的に スピーカから) ハッハッハッハッハ アマーテの奴め」

しほりこむように暗転

2 黒い世界

暗黒

スポットの白光にうかびあがる旅法師

琵琶をかき鳴らし うたい語る

「九つの惑星が一行にならぶ 水星 金星 地球 火星 木星 土星 天王星 海王星 冥王星が 一行にならんで 呪いの重力をよせあつめ 叛乱の縄をなう おそれよ 太陽系の異変 警戒せよ 惑星直列 星たちの逆心は 太陽をはげしく打ちすえ 痛みあまり太陽のふりこぼす呻き声は われらの母なる 地球」にどしゃぶろう 地磁気は狂って吠えたけり とび交う電波はズタズタに寸断され 大気はうろたえて ときならぬ猛暑 旱魃 極寒 水害をひきおこそう 引力は乱れ 地底はくつがえり 大地震の牙が地のおもてを噛みしだこう 死せる火山もめざめて 火柱と噴煙を空たく吹きあげ 十の星の呪いは 暗黒の棒のように直列して あわれな地球をいたぶろう」

3 白い世界

明転

アマール

「(肥満体の 精悍な政治家タイプの男 背広姿で立ち 髪をはげしくかきむしって) 畜生! 夢はおのれの正体をうつしだす無意識の鏡というが それにしても なんて今朝の夢は不気味なんだ え こともあらうに この俺が 青い女の左の目からうまれでた狼の赤ん坊だって? ふん(顔 首 手の甲などをさすりあげ) 十人並みに 女の腰の割れめからオシッコのうぶ湯をひつかぶってうまれでいたら もっと

ましな狼でいれたらうに（両手をひろげ 深刻そうに）え こいつが進化か？ 禿げ頭や五厘パゲにア
ートネイチャーのかつらを使器の蓋のようにおつかぶせるってのが進化か？ せっかく脱け残って 体
中では数すくない野獣の痕跡をとどめる陰毛をピエール・カルダンのパンティでけん命におおいかくすの
が進化か？（体をやわらかくほどこき 喜劇的に）いや 退化だ どんなに ダウイン株式会社謹製の「進
化」というブランドの毛抜き鋏で体中の原始の毛をぬきとったって 所詮は 無毛の 不毛の すっ裸に
レベル ダウイン……やっぱり ぼうぼう燃えさかる大火（退化）だ（歯をむきだし）野郎奴！ するど
くどがった牙も 進化の鑢ごしごしにかかれあ これ このとおり すりへった十五穴のハーモニカ（吠
えて）ゴキブリの吠え声だあ（両手の指をかざし）鉄の爪も いまじゃあ つるつるのピアノの鍵盤（頭
をふり 肩をすくめ 絶望的に）やっぱり いまの俺は 夢の鏡にうつった俺の正体をもういちど別の鏡
にうつしかえして 二つの鏡像のエコーから 生身の俺という得体のしれぬ鏡像を奏でだす 呪いのあわ
せ鏡か（あるきまわり）だが ほんものの狼の死体が俺の父親……というのなら 俺の運命はきまったも
同然 死んだ狼というマイナスの数字と 中年男の俺を俺が処刑するというマイナスの数字をふたつ掛け
あわして ほんものの狼のよみがえりというプラスの答えをひきだすしかねえ（りよう手をじぶんの首に
かけ）こう ぐうっと 両手の人差指と拇指に力をこめ 咽喉の髄をつらぬく気管を閉じさえずりやあ
生命の息の出入りがとまって おれは むかしのまんまのうつくしい狼に逆戻りー（絶叫し）すばらしい
すばらしい じぶん狩りー じぶん殺しー！

タキーリ

「（白痴の娘 かけよって）こわいわ おとうさん！（アマーテに抱きつく）」

アマーテ

「（ふりほどき）おお タキーリ うつくしい娘 人はおまえを 白痴とよぶが 腐った脳味噌に湧く蛆蟲

のような知恵よりは いつもいまはじめて湧きでたばかりの泉の水のような本能の知恵にめざめている
ふしぎな娘（髪をなでさすり）かわいそうに！ 蜘蛛の巣にひっかかった蝶のようにおびえている
タキーリ

「（すすり泣いて）ああ いままでみえていた窓やカーテンがみんなみえなくなつて いままでみえなかつ
た遠くの森や屠殺場がみえてくる（アマーテにとりすがり）いっちゃあいや おとうさん このまます
つと ここにいて！」

アマーテ

「（笑つて）どこにもいきやしないさ」

タキーリ

「太陽風のヨットになんか乗っちゃあ いや」

アマーテ

「（タキーリの背をなでさすり）よしよし」

タキーリ

「（微笑して）好きよ おとうさん」

アマーテ

「（ふりほどき）いい子だから 庭においで 三色堇が咲きだしたよ」

タキーリ

「（快活に）ええ おとうさん お花といっしょに 歌ってくるわ（歌いつつ去る）」

アマーテ

「（顔をおおつて泣き）不幸な娘！ だれのよりも鋭敏なあの子の本能のレーダーに 俺の どんな不吉な

未来が影をおとしたのか（髪をかきむしって絶叫し）助けてくれえ！」

スサーノ

「（あわてて駆け込み 津軽弁で）総理 どうなすったんで？」

アマーテ

「（うろたえ 身づくろって）いや ベつに ま ちよっと カラオケ用発声練習うがいガラガラってとこさ」

スサーノ

「フワッフワッフワッフ（笑って）女どもをよろこばすにや 万事 どでつけえにかぎりまさあね 総理 声だつて あそこだつて フワッフワッフワッフ」

アマーテ

「スサーノ第一書記官 なにか用かね？」

スサーノ

「いえ なに その 地震・雷・火事・親父みてえでつけえ声でトキをつける雄鶏おんどり野郎こそが この国のあつたらすーい時代の朝をおっぴらくとか申しますでな つまりい 総理 たったのいま 国家元首候補選にご出馬の決意を こう ぎゅっと 固められたつてえわけなんですなあ フワッフワッフワッフ 糞と決心は 拳固けんこつのように固えにかぎりまずぜえ なにせえ 下痢は 心にも体にも よくねえですて フワッフワッフワッフ」

アマーテ

「うん いや 待て スサーノ第一書記官 国ってなんだね それやあ 肉屋の店先で逆さにぶらさがった豚の肉のことかね それとも 男にふられた女の憎しみが逆さうらみとなって ニクがク、ニにかわったっ

てしろものかね」

スサーノ

「苦肉の策たあ このこったあ」

アマーテ

「うん だが 待て スサーノ あわてる乞食と政治家はもらいがすくないというが どうも けさの夢は 気になる」

スサーノ

「フワッフワッフワッ 夢?……ふうん あの 有名な女蕩しトルコ風呂荒らしノーパン喫茶入りびたりの お夢さまのことです? フワッフワッフワッ だけど 総理 夢ちゅうのは このうつし身のおそろしくもうつくすい影ですなあ」

アマーテ

「逆に このうつし身こそが 夢のおそろしくもうつくすい影なのかもしれぬ」

スサーノ

「うめえことをいう この手で選挙民をたぶらかしていらっしやるんだなあ して 総理 どんな夢を?」

アマーテ

「青い世界なんだ」

スサーノ

「へっ あの どっちつかずの 口先上手舌先ベラベラ心はなにをおもってるのか皆目見当もつかねえどっちつかずの 生きていても死んでいるとも または どっちもいっしょともいえる あの 空と海のとけてとろとろの うす気味われえ 青の……」

アマーテ

「死んだ狼の牙と 青い女の左の目が結婚するんだ 不気味な快楽の呻き声から 中年男の俺がうまれおちるんだ」

スサーノ

「どっちみち オスとメスが抱きあつて 万物は創造されるのさ キリスト様だつて オシヤカ様だつて おれ様だつて」

アマーテ

「突然 サツと 赤い光が 殺意のように襲いかかってくるのだ……馬の 蹄の音 いななき 鼻嵐といつしよに そして」

スサーノ

「そして？」

アマーテ

「（絶叫し）あいつだ！ アメーノ アメーノの 低く 威嚇する 嘲笑いの声が ガタンと 遮断機のようにおりにきて 俺と 狼の青い世界をさえぎったのだ」

スサーノ

「狼と馬か……フワッフワッフワッフ こいつあ おもしれえ まったくもつてえ 野性味たっぷりの縄文人と 奸智にたけた騎馬民族の 歴史的な対決のドラマだあ

だがねえ 総理 ひるむこつたあねえ たしかに アメーノは ずるで悪わるでむごつたらすい騎馬民族の血を体中にフツフツグツグツグワラグワラ煮えたぎらす この国の暗黒の帝王でさあ そいつは 認めましょ でえてえ この国の連中ときたらあ からつきしの意気地なし 姿のみえねえ お稲荷キツネコンコ

ン様とか 肉体の大鳥居から子どもをひりだしてばかりいるタカミムスヒ カミムスヒのウメヨフヤセ
 ヨタベロヨシネヨのワイワイ神様を おっかながり おそれたてまつります アメーノの奴は その群集
 心理を上手にご利用なすって 万有引力の奴が透明な手で森羅万象をあまねく支配なさるのとまったくお
 んなじ手口で この国の政治を支配していやがるんでさあ つまり 奴は この国のすべての人に 奴を
 この国の唯一絶対の神として崇めたてまつるよう 強制していやがるんでさあ」

アマーテ

「みんながそうでも 俺だけは そうはいかんぞ たとえ 焼野原の棒杭のようにひとりだけぽつんと焦げ
 臭くつつ立つことになるうとも 俺は 絶対に 奴を 神にしたりはせんぞ」

スサーノ

「さすが われらの総理 いまや この国は 月も星もかき消えて まっくら闇のつんつん暗がりの真夜中
 でさあ 人々は 絶対権力をふるう暗黒の帝王アメーノに ガタガタ震えあがってはいても やつぱり
 泥んこ地面にきちつと膝ついて へーい アメーノ様 と 恭順を誓ってまさあ

総理 あなただけです この 暗黒時代に終りをつけることのできる 気高い戦士は」

アマーテ

「いや 待て 俺は 戦士なんかじゃあない」

スサーノ

「じゃあ なんで おべっかな風をパタパタあおぎおこす 華奢な扇子のたぐいで？」

アマーテ

「ふん 俺は しがない 自分殺しの……」

スサーノ

「総理 いいですかね いまや 国中の あつつい期待のまなざしが それこそ レンズの分厚い肉を通過して一点に収斂する太陽光線のように あなたの頭上に注がれていますぞお

どうです 感ずるでしょう 頭のてっぺんが ジリジリっと 焦げて 髪の毛がボウと燃えて 火傷とパゲの同時生産が……

フワッフワッフワッフワ さあ 総理 国家元首候補選にうってでるぞお っと いま この場で 国中に宣言してくださいえよ

アメーノが公然と推すもうひとりの かいらいの国家元首候補ザナーキに 畜生やつつけるぞお っと いま この場で 景気よく バツと 宣戦布告してくださいえよ

わたしら もう じりじりと パイプのように 尻に火がついて じっとしちやいられねえ」

アマーテ

「よし 決心しよう いや 待て すぐなくとも この国の元首とは どんな手足の動物たるべきか……馬だ やつぱり 馬だ 公約の蹄をパカパカ鳴らし 理想のたてがみは風にはためくものの 手綱はアメーノの亡霊にギュッとひきしぼられ 選挙民とよばれる数千万のしなやかな鞭の愛撫で尻つぺたを真赤にはらし 権力とは名ばかりの幻の荷車をガラガラ引きずってはしる 幽霊の馬だ ああ 嫌だ 嫌だ やつぱり 断念しよう 原始の野に 塩っからい汗のしずくをふりまいてはしる狼の孤独こそが 俺にはお似合いだ

しかし やつぱり 出馬しよう 暗黒の帝王アメーノと 手先のザナーキの出鼻をくじき この国に光をとり戻そう」

スサーノ

「(小躍りして) 畜生 闘いじゃあ 平和は退屈な古女房 戦争は小股の切れあがった恋人 さあ 国中の

アマーテの支持者の奴らめ 口をあける ぐうっと 地獄の釜のように 大きくあける どさっと 選挙
資金と指令のゴツタ煮をぶちこんでやつからなあ」

アマーテ

「まさに 地獄だ たがいの尾をガツと噛みあつて おそろしい欲望の環をつくる 政治家と選挙民という
二匹の蛇め（スサーノに）おい スサーノ第一書記官 おまえは いくつになったのかね」

スサーノ

「はあ 二十九歳で フワッフワッフワツ」

アマーテ

「ふん 発射直後のライフル弾のように 熱くって うつくしい」

タキリー

「（指を噛み 泣いて） おとうさん いたいわ」

アマーテ

「おお うつくしい娘 蜂に刺されたの？」

タキリー

「ね おとうさん いつも わたしといっしょでしょ わたし すぐ わかったのよ 三色堇の蜜を吸って

いる蜂がおとうさんだって」

アマーテ

「おとうさんは おまえの指を 毒針で刺したりしないよ」

タキリー

「わたしのいたいのは 毒針のせいではないわ」

アマーテ

「(タキーリの指を口の中に入れ) じゃあ なんで？」

タキーリ

「蜂は いちど毒針をつかうと 死んでしまうというわ(泣く)」

スサーノ

「(タキーリの肩を抱き) うつくしいお嬢さん おとうさんが死にはすまいかって心配だったんでしようが」

タキーリ

「(パツとスサーノから遠去かり) おとうさんは 風だから けっして 死にはしないわ」

アマーテ

「(タキーリの手をとり) さあ いこう タキーリ(スサーノに) ちよつと 娘と 庭を散歩してくるよ
それからトイレだ(頭をふって) どうも けさの夢が 血を吸う大蠅のように 頭にこびりついてはなれない(あゆみだし) トイレで ヒロサワトラゾーのモリノイシマツでもうなってくるか 第二次大戦の修羅場でいやおうなしに人殺しを強制された俺たちは ヒマシ油のようにどろどろとしたナニワ節の液体は とつても便秘にきくんだよなあ」

スサーノ

「総理 ナニワ節のヒマシ油は糞袋をからっぽにするだけですがあね アルコールちゅうのは 魂の袋をからっぽにする副作用もちの下剤ですぜえ」

アマーテ

「(出口で) わかったよ スサーノ 俺の身を案ずるおまえのその気持ちをたっぷり飲んで おまえへの信

頼の念でぐでんぐでん酔っぱらうとしよう(去る)

4 赤い世界

赤い光 地平からこみあげる

スサーノ

「ヘッヘッヘッヘ アマーテの奴 トイレが聞いてあきれらあ へん 大方あ 剥製のヒグマがにゅーっと突っ立っている書齋に泥棒ヒグマのようにしのびこみ 書棚のうしろにかくしたクマ焼酎のボトルを血眼になってさがしまわっているのがおちでさあ へん ほんにクマツタル中野郎奴 だがな おっとどっこい そこにクマ焼酎はありっこねえ え どうして? ふん 総理大臣付き第一書記官のこの俺様がそれぞれそれぞれ大事をとってのンンン……わんざと 隣の衣裳室のテーブルの下にクマ焼酎をばくまいあそばしたってわけさあね え なぜ? ヘッヘッヘッヘ ねえとなれやあ いっ層欲しさの火の手は夜空を焦がす 奴は死物狂いでくまなくクマ焼酎さがしまわり あっ あったあの瞬間が運のつき もう矢も楯もたまらず クマ焼酎を瓶ごとぐーっと飲みほし飲みつくし たちまち 身も心もグロッキー野郎のスッチャラカメツチャカ フワッフワッフワッフワッ つまり そこが この俺様の狙いどころって訳ね おわかり? 貧乏な漁師の家に生まれ いまをときめく宰相アマーテの第一書記官にまでのしあがったこの俺様としちゃあ 宰相アマーテこそは 征服すべき絶好の山 奴をいかすも殺すも 俺様の匙加減ひとつってわけでさあ ヘッヘッヘッヘ」

スサーノの笑いに アマーノの「ハッハッハッハ」が重なり

おそれおののくスサーノ

遠くから 馬の蹄の音 鼻嵐 いななき みるみる近づいて 轟音となる

アメーノの声

「死火山エル・チチョンが よみがえるぞ」

噴火のはげしい音

天をよじのぼる火柱

ふきあがる赤黒い噴煙

赤い女たち うすい赤のコスチュームでかろうじて身をつつみ ギラツと輝やく剣をふりかざしてあら

われ 叫び声とともにスサーノを襲って 衣服をはぎとり 全裸にする

蹄の音 馬の鼻風 いなき いっ層つのり虚空をはしる 巨大な赤肉の馬

ザーザーと土砂降る血

圧倒され 悲鳴をあげて地に伏すスサーノ

その上を荒れ狂う赤肉の馬

アメーノの声

「ハッハッハ スサーノ わしがわかるか」

スサーノ

「(かろうじて顔を上げ) へえ その声のアメーノちゅうのは 国中の どんな寝小便垂れだつて ちゃあんと知ってまさあ」

アメーノの声

「スサーノ エル・チチョンはおそろしいぞ 皮を逆さはぎされた 血だらけの赤肉の馬となって 空を荒れ狂い 巨大なペニスの槍で おまえを刺し殺そうとしている」

スサーノ

「ひええ なぜ この 善良な市民たるわたしを刺し殺すので？」

アメーノの声

「理由はない」

スサーノ

「げえっ 刺し殺そうとする側に理由がねえったって 刺し殺されようとする側じゃ 刺し殺されたくねえ 星の数ほどの立派な理由がありますさあ」

アメーノの声

「口へらずな奴め ところで スサーノ おまえは 一体全体 なにものじゃ」

スサーノ

「そいつを知りてえばかりに わんざわざ おふくろの子袋というまっくらな牢屋を脱獄しちゃみたもののおてんとうさまが ペカペカ照ってる娑婆にでて いっ層 じぶんちゅうもんが 総理アマーテの第一書記官でんべんだらり牛の涎みてえ毎日ですすだけでいいもんなのか それとも アマーテを踏んづけ蹴おとしてアマーテをはるかにしのぐ大政治家たるべきか へえ とんと心は迷いの宮のうちでさあ」

アメーノの声

「わしに従うか」

スサーノ

「ふん もし そいつが 大政治家という おそれおおい聖域の扉をおっぴらく すんばらしい鍵ならばね ……」

アメーノの声

「わしが 駅の公衆便所の アンモニアで錆びついた鍵を おまえに手渡しするとでもおもっているのか」

スサーノ

「いえいえいえ 従いまさあ で どうすれあええのぞ？」

アメルノの声

「光が夜明けの川べりをはしるよりもすばやく 時の流れが人の肉体をかけぬけるよりもなめらかに アマ
ーテを殺し ザナーキ国家元首の実現に力をかすのだ」

スサーノ

「へえ で もし そいつができねえとなれあ……」

アメルノの声

「エル・チチョンの馬が 巨大なペニスの槍で おまえの心臓をひと突きじゃ ハッハッハッハッハ」

急速に旋回する赤い光

蹄の音 馬の鼻嵐 いなき いっ層つのり 虚空をはしる巨大な馬

土砂降る血の雨

ひれ伏すスサーノ

赤い女たち 叫び 踊り 血で血の雨をすくい飲む

赤い女1

「馬」

赤い女2

「赤い馬」

赤い女1

「赤い肉の馬」

赤い女2

「皮を逆さはぎされて血だらけの馬」

赤い女1

「エル・チチョンの馬」

赤い女2

「いなくなつたびに 巨大なペニスの先から 血のしずくを垂らす オナンの馬」

赤い女1

「大地のくらしい子宮に まっかな精液をもらす オート・エロティシズムの馬」

赤い馬 消滅

地平から虹の光 萌えそめる

うつくしい絃楽

赤い女たち 円環となり 中心を凝視する

赤い女1

「赤い馬の精と 大地の卵が まざりあつて」

赤い女2

「暗黒の子宮に 呪いの命が芽ぶく」

赤い女1

「馬の残忍さと大地の慈愛がとけあつて むごたらしいエロスの女がうまれでる」

全裸のウズーメ 地からじよじよに身をおこし

手ですべらかに舞い

やがて立ち みやびやかに舞う

赤い女2

「ウズーメ」

赤い女1

「エロスの花」

赤い女2

「自由の風」

赤い女1

「やわらかい舌の雨……香ぐわしいほつれ毛の風……快樂の蜜をかもしたす臍の井戸……死のよろこびを出
入りさせる肛門のドア……海のようにしめった足の裏……」

赤い女2

「ウズーメ」

ウズーメ ゆるやかに舞い うち伏すスサーノに近づき 頭上で優美に体をひらく

赤い女たち

「ウズーメ」

ウズーメ

スサーノ 手をウズーメにのべ 立ちあがる

溶暗

アメルノの声

「ハッハッハッハッハ」

みるみる遠のく蹄の音 馬の鼻嵐 いななき

暗転

5 黒い世界

暗黒

スポットの白光にうかびあがる旅法師

琵琶をかき鳴らし うたい語る

「空が血まみれだ はげしく月経する黄昏の空 出血はとまらない 血は流れさり 夜は蒼ざめる

エル・チチヨンがめざめる 死者がよみがえる 死火山が爆発する

わざわざは幸福なものだけにやってくる 汝は幸福か しからば メキシコ南東部 標高二二二五メートル

ルの死せる山の突然の大噴火をおそれよ 吹きあげられた火山灰の雲をおそれよ 灰のマントにすっぱり

つつまれた地球をおそれよ

真紅の薔薇は不吉だ サウジアラビアの真紅の夕焼けは災厄だ

血は甘い 血は死臭を吐く イギリスの血のいろの夕空は 死の匂いでいっぱいだ

燃える火は世界を灰にする ニホンの火にあぶられる西空は灰になる

日射量はへり 酸性雨は森を枯らし 湖水の魚を殺し 人類を狂乱の淵に追いやる

空が血まみれだ はげしく月経する黄昏の空 出血はとまらない 血は失われ 夜は蒼ざめる」

6 白い世界

明転

背広姿のスサーノ ほとんど乳房とヒップを露出したウズーメを抱く

スサーノ

「（接吻して）甘^{あめ}唇……」

ウズーメ

「毒の甘さよ」

スサーノ

「で 今日の毒は？」

ウズーメ

「青酸加里の位でいえば幕下十両クラス 銀座の目抜きビルにバアを出したいのよ」

スサーノ

「よろしい ウズーメちゃん 銭^{せんご}はだそう」

ウズーメ

「（スサーノの首にかじりつき） まあ うれしい！ スサーノ 第一書記官ちゃん」

スサーノ

「（ウズーメの手をふりほどき） 齒^{はん}には齒^は 毒^{どく}には毒^{どく} 条件があるぞお ウズーメちゃん」

ウズーメ

「毒と毒をシェーカーでふれば 毒を消しあつて 気の抜けた炭酸水になっちゃうわ」

スサーノ

「ええか ウズーメちゃん アマールテ総理を おめえさんの まっくろくろ焦げ黒ダイヤモンドみてえな目

で こう ウィ ウィンク ウィウィ と 誘惑しちゃうんじゃ」

ウズーメ

「あなたのボスじゃあないの」

スサーノ

「異常気象よっか 中性子爆弾よっか 癌よっか おそろすーいのは じつちに この 自分殺しちゅう
危険思想だあ けっして けっして 他人を やい畜生！ なんちゅうて責めたりはせん いっつも 自
分のせいじゃあ せいじゃあ と ほざきやがって 手にぎゅつと握った短刀を 自分の心臓に ぐつと
突きつける この ひろい世間の毎日毎晩かんぞえきれねえほどの 詐欺 放火 買春 麻薬 強盗 人
殺し すりかっぱらいを ぜーんぶ 自分のせいにしてやあがって 強姦輪姦テンカン泡ふけや泥んこわら
ずおでこにのせて へえ こいつあ おいらの犯罪でござんす と 一丁見得切るひまもあらばこそこ
いつあぜーんぶ わたすのせいであ と カッコーつける（怒声で）てやんでえ 自分だっけいい子に
なりやがって 国中の男衆女衆は みーんな 猿芝居の見物たあ ゆるせねえー！」

ウズーメ

「あの男が 自分殺しの思想の……」

スサーノ

「（ウズーメと自分の唇に指をあて）しーっ こいつあ とびつきり上等 鮪上トロトロトロの 国家重大
機密つてえんだぞお」

ウズーメ

「（スサーノの指をはらい）わかったわよ ふん あんたたちにとっちゃあ 国中のゴキブリの数の方が
もっと重大な国家機密なんでしょ はずかしくって 人にいう気にもならないわ」

スサーノ

「(接吻して) やっぱり ウズーメちゃん お利巧ちゃん」
ウズーメ

「で 総理アマーテの自分殺し病をなおすには わたしの この 若くピチピチした肉体が なによりの妙薬ってわけ？」

スサーノ

「(接吻して) やっぱり ウズーメちゃん お利巧ちゃん」
ウズーメ

「ふん どうせ 耳の穴のうぶ毛にまで 悪企みの電流をヒリヒリためているあなたのこと……わたしにアマーテを誘惑させて それから どんなおそろしい罠を国全体にしかけようとしているのか 知ったもんじゃあないけれど ま (唄って) ケ セラ セラ わたしの知ったあこっちゃあない どうせ 国家なんて 娼婦の置き屋か 神経症患者のサナトリウムでしょ いいわ まかしといてえ (衣服を脱ぎすてつつ 歌い 踊って 去る)

ジョージ ジョージ 情事が好きよ

国家 国家 コッカコーラの服ぬいで
ね

ウッウーン

セイジ セイジ 政治が好きよ

アッ アーン

情事君も 政治君も 大^だい好き」

(○印にアクセント)

スサーノ

「ヘッヘッヘッヘ アマーテの奴め ご主人づらみせびらかすも今のうち ふん なにが この俺様への心からの信頼じゃい 信頼？ 心霊？ 震振？ 神鈴？ 神さんの首にチリンチリン 馬の鈴ぶらさげるのも シンレイなら 心が人魂のボーッと青い光の塊りにふくらんで あっちゃこっちゃ ふーらふらさまよいあるくのも シンレイ ええ 糞！ 忌々しい 徹頭徹尾 頭のとつぺんから足の爪先までこれ 嘘つばちのコンコンチキたる政治家にとっちゃあ 最大の禁句が『信頼』ちゅう およそ信頼しちゃあいけねえ言葉のはず そいつを この俺様にむかって こつぱずかしげもなしにほざくたあ うん 絶対にゆるせねえ フワッフワッフワッフワ だが もう 奴の命はもらったも同然 俺様へのためえ勝手なひとりよがりの信頼がそのじつ奴めの致命傷とわかったその時にや すでに 奴は あわれはかなし（唄って） 三途の川の舟の中……フワッフワッフワッフワ」

溶暗

7 赤い世界

暗黒

遠くを馬の蹄の音 鼻嵐 いななき

赤い光萌える

低く 大地の鼓動をうつパーカッション

赤い女たち 剣をふりかざし 不気味な叫び声とともにほしりでる

高潮する音楽

赤い女たちの置いた樽の上にかかけのぼる全裸のウズーメ 髪ふり乱し 踊り狂う

赤い女たちの喚声

ウズーメが股をひらくたびにどつとわく哄笑

赤い女たち

「ウズーメ

ウズーメ」

ウズーメ

「(狂乱の声で) あ あそこを アル中の アヒルちゃんが あーらあら」

赤い女1

「クマ焼酎を瓶の口ごとラツパ飲みした クマツタ酔っぱらいへべれけ熊」

赤い女2

「泥酔の植木鉢で 思慮の根っこも理性の茎もバツサバツサ切り落とし」

赤い女1

「狂気の赤い花だけになっちゃった あわれなアマーテ」

赤い女2

「どおりで お鼻が ストロベリーのように真赤だわ」

ウズーメ

「腐って ちょうど 食べ頃なのよ (絶叫し) ここにひっぱって来て！」

赤い女1

「背広姿でまろびでるアマーテの襟首をひつつかみ) ねええ 総理大臣様 深酒はソーレソーレソーレ大事の
もとよ」

赤い女2

「(アマーテの手首をとり) ねええ 狼の赤ちゃん おかみの御用は大丈夫？」

赤い女1

「(アマーテの腰を蹴り) 狼が馬になっちゃあうまくないわ」

アマーテ

「(泥酔して) 馬は鹿といっしょでなければお利巧もんさ」

赤い女たち

「(どっと笑い) その鹿をくらう狼は馬鹿よりもっと馬鹿かいな」

ウズーメ

「(怒って) さあ みんな にせ狼の化けの皮をひっぱがせ」

赤い女たち アマーテにとびかかって 全裸にする

赤い光の渦巻き

官能の音楽燃えさかる

剣をかざし 円陣で踊る赤い女たち

樽の上で長い髪を巧みに体に巻きつけて踊るウズーメ

アマーテ 赤い女たちの円陣からのがれようと焦るが

赤い女たち アマーテを追いつめ 樽の上におしあげる

アマーテ

「(必死に) ここは どこだ おれはだれなんだ」

ウズーメ

「(アマーテを抱きしめ 接吻して) あなたはアマーテ わたしはウズーメ 抱きあって あたらしい神話をうみだすのよ」

アマーテとウズーメ 樽の上で交媾

妖しい光の照射

溶暗

沈黙

8 黒い世界

暗黒

スポットの円光の中であざわらうスサーノ

スサーノ

「(カメラをかざし) バツチリ 写しちゃったぞ アマーテとウズーメの濡れ場をさあ フワッフワッフワッ フワッフワッフワッ さあてと こいつをネタに アマーテ夫婦の仲を ザオリ 借金の証文を引き裂くように裂いてやろうか へん なにが狼じゃあ 犬さ 政治づいた犬さ ポリテイックな犬 ポルノッポイ犬 ポリーヌじゃあねえか ふん この俺様の手にかかれあ アマーテ野郎の牙と爪をひっこぬき あわれなポリーヌ いや ポリーヌにしちまうんだあ 朝飯前のジョギングひとつぱしりだあ フワッフワッフワッフワ」

暗転

尺八すすり泣く

9 白い世界

明転

タキーリ

「(悲しく唄う) (ギターの伴奏)」

桜の花はなぜ散るの

鶯はどうして飛びさるの

風は木の葉のそよぐあいだしか生きられないの

光は

暗闇をみつめてばかりいるかわいそうな目のね」

スサーノ

「(忍びよって タキーリを背後から抱きすくめ) 好きだよ タキーリちゃん」

タキーリ

「キヤア(絶叫し ふりはどいて逃げさる)」

スサーノ

「(せせら笑って) 白痴だから美しいんじゃないやなくて 美しいから白痴なんだ ふん 俺様のお利巧さんの種をあの子の娘の雪のようにしろい肉の畠にまけあ 美と醜 利巧と白痴の斑らぶちのポニーがうまれらあな さーてと(電話の受話器をとり ダイヤルして) あ スサーノだ 社長をよべ 決まってるじゃあねえか すぐにだ お おめえか 三億円の件はどうなった? あん なんてえ おめえさんの会社はなあアマーテ総理というカンガルーの子袋の中のベビーちゃんなんだぜえ つまりはよお アマーテ総理の

運命はなあ すなわち おめえさんの会社の運命

アマーテ総理が国家元首になれあ おめえさんの三億なんぞ 十倍 いや 百倍となつて おめえさんの会社の金庫にご帰還だあ え そいつができねえというんなら たった今この一瞬の缺で アマーテ総理とおめえさんの絆の糸を プツツン 断ち切るぜえ うんうん いい子じゃ で いつ? 明日? ふん まちげえねえな そんなじゃあ いつもの銀行口座に ポーンと あす ぶち込んでおくれやす かつきり三億円 あすの三時のオヤツ代りだぜえ えっ 馬鹿もーん 俺様名義の口座にきまつてるじゃあねえか トンマトンボノコンコンチキ奴(受話器を叩きつけるように置く) ふん これで アマーテ殺しの金が五十億円かあ フワッフワッフワッフワ」

暗転

横笛のすすり泣き

明転

スサーノ

「(受話器を肩と首のあいだにはさみ 煙草をとりだして) へえ つまりい そのお わたくしめといたしましてはですなあ じつのところお アメーノ様じきじきのお言葉もございましてですなあ そのおつまりい 現在のところはですなあ アマーテ総理の第一書記官としての立場をばですなあ ぐいとお逆手にとつてですなあ アマーテ側の情報と金をばですなあ こう どどどどおとザナーキ側に横流しをばいたしましたですなあ アメーノのご意向に沿いたいものとですなあ まあ そんな具合におもっているわけでごえましてですなあ すがいましてですなあ わたくしめからあなた様にお送り申し上げますこの一億円もですなあ 出所はあくまでも秘中の秘 心にふかく秘めていたでですなあ よしんば 総理アマーテから電話がありましたでもですなあ ああ 国家元首候補選じゃあ まちげえなくア

マーテを支持いたしますと まあ そんな具合におっしゃっていただけますればすなあ まったくも
 って好都合なんでござえます サターナ様 えっ いや いや ご心配ご無用 わたくしめのこれっから
 のずうっと先の将来につきましてはすなあ 万事アメーノ様が いいようにとりはからってください
 となつてございますので へい へい おっとどっこい いえ こっちのことで そんなじゃあ 国家
 元首候補ザナーキに くれぐれもよろしくお伝えくださいませ 実力者サターナ様 ええ 国家元首ザナ
 ーキの実現のためなら よし 卑怯者 裏切り者のそしりをどつぷり煮え湯のように浴びようと 全力
 あげてご協力させてもれますで はあ じゃあ 失礼させてもれます 実力者サターナ様（丁重に受
 話器をおき フーッと息をつき ふと煙草に気づいて点火し うまそうに吸いつけ）ざまあみやがれ
 ザ・エンドのフィニフィニフィニツシュの完結編 これで終ったあ アマーテ国家元首実現のためと大ボ
 ラ吹いて 全国のアマーテの信奉者からかつさらった五十億円をそっくりザナーキの陣営に横流しする大
 逆転劇は終ったあ（歩きまわり）フワッフワッフワッフワ たったのいまのこの一瞬 総理アマーテの首
 は スパツと 胴体から切断されやがったのさあ あとは ごゆつくり ごゆつくり そう 一ミリミ
 リ 美しい娘がしわくちやくちやの老婆にかわっていく残酷なスロースピードで 首と胴体の切り口がず
 れてつてさあ ゴホンとせきした拍子に ボタツと 首が地面におっこちる（立ちどまり 目をむいて）
 えっ なんじゃあ？ これが悪だつて？ じゃあ 善とは いったい 何じゃい アマーテの奴が じぶ
 んの第一書記官たるこの俺様よりは クマ焼酎のひんやりと冷てえボトルの肌ざわりにずうっと重大な関
 心をおっぱらい 第一書記官が敵側に寝返りをうてうて としむけんばかりのぐうたらのだらしねえ行動
 がもし善とよばれるのでありゃあ その善の至極当然の結果にすぎない俺の行動もまた全体全然善じゃあ
 ねえか まして 奴めが「自分殺し」なんぞという ぜい沢な文明病にすっかりかぶれてブツブツ臭いガ
 ス発生装置となつて腐り切っているちゅうのならば その手助けをするこの俺様こそは 史上稀れなる大

善人 大聖人じゃあねえか フワッフワッフワッフワ

アマーテの信奉者たち入る

アマーテの信奉者1

「やあ スサーノ第一書記官 元気かね」

スサーノ

「(居丈高に) やあ アマーテの信奉者諸君 (信奉者1の顎を指でもちあげ) ところで 君い 一体全体 だれのおかげで 君い 今の 国会議員の称号を手に入れたのか お忘れじゃあねえだろうなあ え? この私が 君いのお望みどおり シナリオ通りの筋書きで 総理アマーテにとりなした そのお蔭じゃあ ねえのかい え」

アマーテの信奉者1

「(おそれをなし) け けっして 忘れてなんぞ」

スサーノ

「(顔をのぞきこみ) そうかねえ」

アマーテの信奉者2

「いやあ スサーノ第一書記者さん ご機嫌うるわしゅう」

スサーノ

「(鼻でせせら笑い) われらの敬愛する偉大なる総理アマーテは ついに 国家元首候補選にご出馬を決意 され 全国の支持者の絶大なる支援を求められた いまや われらは 一枚岩の団結をさらに強化し アマーテ国家元首の実現に努力しなければならん これからは いっ層 総理アマーテは第一書記官スサーノ 第一書記官スサーノは総理アマーテである (ほくそ笑み) ええか 君ら 私を第一書記官とおもって

軽くみちやいかんぞお 私を総理アマーテそのものとおもつて尊敬せんけれやあならんぞお」

アマーテの信奉者Ⅰ

「(こびへつらい) 万歳 あなたのようにな 忠実さは地球のまわりをはなれない月 有能さは万有引力のご

とき第一書記官をおもちの総理であればこそ かならずや 国家元首選勝利は現実のものとなろう」

スサーノ

「(おもむろに) 総理は 国家元首候補選の準備でご多忙だが 君らの調達してくれた資金については心からの感謝を表明しておられることをお伝えしておこう また きょうの君らの春の陽ざしにもまごう温かい来訪をも その熱のぬけさらぬまに総理にとくと報告するとお約束するよ」

アマーテの信奉者たち

「(手をあげ いっせいに) 国家元首候補アマーテ万歳」

スサーノ

「(帰りかける信奉者たちに) やい てめえら なんか 忘れちゃあいねえかね」

アマーテの信奉者たち

「(あわてて) 第一書記官スサーノ万歳(去る)」

暗転

11 黒い世界

暗黒

津軽三味線はげしくすすり泣く

スポットの白光にうかびあがるタキーリ

野の花々を胸に抱き 頬ずりして かなしくうたう（ギターの伴奏で）

「おとうさん どこ？」

なんの花になっちゃったの？

まっしろいヒメウツギの花？

それとも

黄いろいオニノゲシ？

おとうさん どこ？

野の花になったのなら

散っちゃあいやよ

わたしが摘みにいくまでは

散っちゃあいやよ」

暗転

12 白い世界

明転

アマーテ

「おや タキーリ 白痴の うつくしい娘 どこにいくの？」

タキーリ

「（アマーテをみずに）おとうさんをさがしにいくの」

アマーテ

「(タキリーを抱きしめ) ここにいるじゃあないか」

タキリー

「(必死にふりほどき) ここにはいないわ ずっと遠くの 野のはてにいるわ (はしり去って) おとうさん」

アマーテ

「俺と娘の位置がくると逆転して 俺じしんが白痴になったような気がする (氣をとりなおし) おーい スサーノ第一書記官」

スサーノ

「へえ いい酔いざめで」

アマーテ

「太陽が西と東をとりちがえたり 高貴の婦人がホテルの男性用トイレにまちがって入ったという事件は なかったかね いまや 宇宙創世五十億年の歴史はさめた紅茶って感じにふけちゃったから ここいらで ちょっぴりきつい風味をそえるレモンの一しずくがいるのだ ねえ スサーノ」

スサーノ

「(神妙に) へえ 総理 国家元首候補選の準備は完了でさあ 汽笛一声 あとはもやい綱といって船出を待つばかり 発情期の牡馬さながら いろけたつぶりの水平線のカーブを牝馬にみたててつっぱしりつてどこでさあ」

アマーテ

「(満足そうに) ありがとう スサーノ 俺の忠実な右腕で左腕で 右脚で左脚で 俺の心臓そのものの第一書記官」

スサーノ

「まるつきり ヒットラー株式会社附属屠殺場の人体部分交換所みてえだぜ」

アマーテ

「いっそ おまえの若々しい部品と 俺の使い古しの部分と すっぱり 交換できたらいいのだが」
スサーノ

「ごめんこうむりまさあ ところで総理 全国の支持者からザラザラつとひっかき集めた選挙資金は ふたたび 全国の アマーテ国家元首実現を待望してやまねえ実力者たちに きれえさっぱり ぶちまけてしめえましたぜ」

アマーテ

「ありがとう じゃあ 実力者サターナも ザナーキ支持の旗を 俺の側へとふりかえたのかね」

スサーノ

「もつつろーん 太陽がけっして月ではないように サターナはけっしてザナーキ支持者じゃねえんで」

アマーテ

「(躍りあがって) でかした スサーノ 勝利の女神が微笑んだぞ」

スサーノ

「(電話の受話器をとり ダイヤルして) ああ 実力者サターナ様でいらつしやいますか わたくす 総理
アマーテの第一書記官スサーノでござえます はっ 先程はありがとう存じました はっ 総理とかわります」

アマーテ

「(受話器をとり) やあ サターナ 元気かね えっ まあ なんとかね やっ そいつありがたい 君

を信ずるよ もともと 政治は暗黒を照らして道のありかを人にしめす光の現象であるべきなのに いま
は まったくの逆 どんなあかるみの道をも暗黒で塗りつぶしている 俺は闘うよ 目先の卑しい利権に
かられて大義の空をみうしなえば 自由の鳥は 俺たちに見切りをつけて 永遠のうつろさへと飛びさる
だろう うん サターナ君の協力がぜびとも必要なのだ うん ありがとう 君を信ずるよ じゃあ 奥
さんにもよろしくな（受話器をおき スサーノの手を握りしめ）第一書記官 君の手は 寒い時代のここ
りをとかす暖炉のようだ」

スサーノ

「おお 総理」

ふたり かたく抱きしめあう

溶暗

はげしく宙を裂く横笛

13 青い世界

青い光旋回する

狼の遠吠えつもの

どっと倒れ伏すスサーノ

立ちつくすアマーテ

青い女たち 手に手に鏡をふりかざし 喚声をあげて踊りで アマーテをひきずり込み 衣服をはぎと
って 中央の台座にすえる

青い女1

「服やズボンはくらしい雲」

青い女2

「すっぱだかはきらめく太陽」

青い女1

「青い青い太陽」

青い女2

「狼の太陽」

青い女1

「アマーテの太陽」

青い女2

「（アマーテの髪にじぶんの小指をからませ）ほうら アマーテの髪とわたしの小指が性交して（小鳥を空にはなち）小鳥がうまれでる……」

青い女たち

「太陽はセックスの溶鉱炉」

青い女1

「（アマーテの耳を歯で噛み）ほらねえ アマーテの耳とわたしの歯が性交して（緑の木の葉をまき散らし）緑の木の葉がうまれでる……」

青い女たち

「アマーテは増殖の樽

アマーテは光明の籠

アマーテは恩寵の皿」

ファンファーレ高らかに吹奏

突然沈黙

暗転

14 赤い世界

馬の蹄の音 いなき 鼻風 みるみる接近

赤い光あふれでる

降りしきる閃光

噴きあがる火柱

とどろく爆発音

赤黒い噴煙たちこめる

青い女たち 散り散りに逃げさり

倒れ伏すアマーテ

アマーテの声

「ハッハッハッハッハ」

赤い肉の馬あらわれ 虚空をかけずりまわる

赤い女たち 剣をふりかざして踊りで

スサーノをとりひしいで裸にする

赤い女1

「(剣を擬し) スサーノ 心臓を」

スサーノ

「(胸をおさえ) 助けてくれえ」

赤い女2

「臆病者は おのれじしんをすら裏切る」

赤い女1

「ひとりをいつわるものは世界をいつわる」

赤い女2

「(スサーノの舌をひつつかんで剣を擬し) 舌は肥ったいかさま師だ」

赤い女1

「(赤い女2を制し) 待て (剣をスサーノの心臓に擬し) 舌は何枚でも心臓はひとつ 言葉はいいつくろつても心はいいつくろわぬ」

赤い女たち スサーノを押し倒し 剣をふるう

スサーノ絶叫

赤い女たち スサーノの胸から血まみれの心臓をつかみだす

赤い女2

「(嘲笑い) アメーノとの約束をはたすまでは この心臓はおあずけよ」

スサーノ

「(必死にとりすがり) 俺の心臓をかえしてくれえ」

赤い女1

「(ふりはらつて) 心臓の重量分だけ 身軽になるわ」
赤い女2

「(高笑い) もう アメーノを裏切れないわよねえ」

赤い女たち嘲笑し 叫んではしり去る

尺八の絶叫

溶暗

15 黒い世界

暗転

スポットの白光にうかびあがる旅法師

琵琶をかき鳴らし うたい語る

「人魂が空をよぎる ハレー大彗星が近づく 妖しい光の髪をなびかせた女の首が 目のない目で われらの心をのぞきこみにやってくる 億万兆キロメートルもの髪が 青じろい唇をひらいて 太陽の光をすり地をくらくする 銀河系にこだまする呻き声が 燐光となって降り注ぎ 人の心を燃やす

人魂が空を食べる うつくしい蛇が宇宙の海を殺す

不吉のホーキ星 血に飢えたホーキ星 殺りくのホーキ星がやってくる

災厄のチリ 呪いの氷 怨みの水素ガスをよび集め 女の首が 舌のない舌で われらの魂をしゃぶりにやってくる」

16 白い世界

明 転

タキリー

「おかあさん おとうさんは まっしろい鳥になってしまったわ」

ツクーヨ

「ばかねえ この子は どうして人間につばさはえるのよ」

タキリー

「わたしの好きな人にはみんなつばさがあるわ」

ツクーヨ

「おまえ おとうさんが好きなの？」

タキリー

「わたし まっしろい鳥になって飛んでいってしまう人大好き」

ツクーヨ

「いやらしい娘ね 詩人はみんな白痴なのかしら あ だれかくるわ さあ タキリー あっちにいったら
っしやい 人前で恥をさらすもんじゃあないわ」

タキリー去りかける

スサーノ出会いがしらにタキリーとぶつかりかけ 身をひるがえして抱きすくめる

タキリー絶叫

ツクーヨ

「まあ スサーノ第一書記官 人前で婦女暴行の恥をさらすのがあなたの道德なの？」

スサーノ

「(ツクーヨに気づき パツとタキーリをはなし) えっへっへっへ (タキーリ 泣いて去る) これあ これあ アマーテ総理夫人 男という動物は うまれつつきの 弓の張りつめでございましてなあ 女とみれあ もう 攻撃本能の矢をぐつとつがえて ひようと射るのがつとめでござんす」

ツクーヨ

「ホラチウスは アポロは常に弓を張るとは限らぬもの といったけれど あなたときたら ご大層な相場破りってわけ？」

スサーノ

「えっへっへっへ ホラチウスのほら吹き野郎は インポちゅうわけちゅうて あんまり じまんにもならねえローマ人でさあ」

ツクーヨ

「(妖艶に姿態をくねらせ) 草食動物のくせして肉食動物を食うような話ねえ」

スサーノ

「アフリカ象はライオンだつて踏み殺しますぜえ」

ツクーヨ

「ところで スサーノ第一書記官 主人アマーテへのあなたの忠誠は バイカル湖? それともマシユー湖?」

スサーノ

「なんの話で？」

ツクーヨ

「透明度よ」

スサーノ

「(たじろいで) 一点濁りなき水晶の井戸でさあ」

ツクーヨ

「(おもわせぶりに) あなたと主人はホモじゃあないかっていう噂の雲がわいているわ」

スサーノ

「(ほっと肩をなでおろし) ふうん なかなか粹な風評ですなあ ついに このわたしも フランスの大文豪
アンドレ・ジッドの兄弟分ってわけで」

ツクーヨ

「スキヤングルの残飯を食べて肥るのはブラックジャーナリストの豚だけよ」

スサーノ

「(ポケットから写真をだしてツクーヨに渡し) その噂を否定するのに言葉の奴らのかましい弁護はい
らねえや」

ツクーヨ

「(写真をしげしげとみ) まあ アマーテ総理の濡れ場写真なんて アマーテ政権のルール上におかれたと
んだ置き石ね で 相手の女は？」

スサーノ

「エロスの女ウズーメ 女陰びらきの技にかけちゃあ 古代ギリシアのバウボとならぶ女英雄でさあ」

ツクーヨ

「(笑いだし) ウズーメは そのじつ あなたの情婦じゃあなくって？」

スサーノ

「(あわてて) 上司たる総理大臣と女を共有すべし という第一書記官職務規定があれやあいんだが」

ツクーヨ

「(写真をスサーノの顎につきつけ) ねえ これ 撮影者はだれ? どこで入手したの? まさか あなたとウズーメの毘じゃあないでしょうね」

スサーノ

「(うろたえて) とんでもハッパン ツクーヨ奥さん わたしは 只 総理アマーテに関するですなあ すんべてえの情報をば こう どさつと 奥さんの腕の中にほうりこむってえのを わたしの職務と まあ そう考えてえいるだけのことです」

ツクーヨ

「わたしの知りたいのは むしろ あなたに関するですなあ すんべてえの情報よ」

スサーノ

「つまりい こちとらさんの 萎縮時と勃起時の寸法をば 知りてえんで?」

ツクーヨ

「まあ 自信家なのねえ ともあれ この写真 証拠物件としていただいておくわ もっとも だれの犯罪立証のためかは別として……」

スサーノ

「強姦や売春がもし犯罪ならばあ そいつをりよう方とも好きで好きでたまらねえーちゅう 世界中の女たちは みんな 死刑ちゅうわけで?」

ツクーヨ

「(厳しく) お黙り わたしをひとりにして」

スサーノ

「フワッフワッフワッフワ 女はひとりじゃあ生きられねえ（去る）」

ツクーヨ

「（写真を凝視し やがて狂乱 力いっぱい引き裂いて投げすて 髪ふり乱し 泣きくずれる）アマーテ！
愛しているのに……」

溶暗

17 黄いろい世界

黄いろい光さしそめる

犬の悲鳴じみた吠え声

ブラス楽器の乱奏

黄いろい光狂いまわる

手に手に玉をかかげもつ女たち うすい黄のコスチュームにかろうじて裸身をつつみ 髪ふり乱して踊る

黄いろい女たち

「ツクーヨ

ツクーヨ」

黄いろい女たち ツクーヨをとりかこんで踊り やがて ツクーヨから衣服をはぎとって 裸身にする

黄いろい女1

「むかしむかしのアマーテは女だった」

黄いろい女たち

「(野卑な声ではやしたて) ひえーっ」

黄いろい女2

「むかしむかしのアマーテはツクーヨの姉だった」

黄いろい女たち

「(下卑た声で) ふらーっ」

黄いろい女1

「むかしむかしのアマーテはスサーノの姉だった」

黄いろい女たち

「(わいせつに) あっあーん」

黄いろい女2

「むかしむかしのアマーテは 男のザナーキの左の目からうまれた 男女両性のもち主だった」

黄いろい女たち

「(官能的に) うっうーう」

黄いろい女1

「むかしむかしのツクーヨは男のザナーキの右の目からうまれ むかしむかしのスサーノは男のザナーキの
鼻からうまれた」

黄いろい女たち

「(快樂の声をあげ) おーおー」

黄いろい女2

「そして いま アマーテは犬 ツクーヨは犬 スサーノは犬」
黄いろい女たち

「(嬌声をあげ) 太陽は犬 月は犬 馬は犬 人は犬(女たち 地を犬のように這いずり) 狼は犬」
やがて黄いろい女たち立ちあがり ツクーヨをとりまいて踊る
黄いろい女1

「さあ ツクーヨ 姉を男にして結婚した二重の邪しなもの」
黄いろい女2

「四つん這いになって 地をなめずれ」
黄いろい女1

「姉のアマーテへの憎悪を糞にしてたれろ」
黄いろい女2

「兄のアマーテへの愛を小便にしてたれろ」
黄いろい女1

「夫のアマーテへの怨みを涙にしてたれろ」

黄いろい女たち 四つん這いになってはいずれツクーヨをとりまき 踊り狂う

ブラス音楽 不協和音をばらまく

黄いろい光渦巻く

突然すべて沈黙

暗転

18 赤い世界

遠くから馬の蹄の音 鼻嵐 いななき
赤い光みるみるあふれ
はげしい爆発音
火柱つつ立つ
赤肉の馬あらわれ 黄いろい女たちとツクーヨを蹴ちらし
溶暗

19 黒い世界

暗黒
スポットの白光にうかびあがる旅法師
琵琶をかき鳴らし うたい語る

「エル・ニーニョ 神の子がうまれた 南米ペルー沖の水の産道が血を吐いた エル・ニーニョ 神の子が
海のおもてに火の息を吹きかけ 海水が燃えあがる わざわいなるかな エル・ニーニョ 神の子はわざ
わいなるかな 燃える海水は アンチヨビの命を灰にする 燃える海水は 大気をあぶり 風の流れを乱
し モスクワの冬を腐らせ インドの春を氷らせ ニホンの夏をふしだらにする エル・ニーニョ 神の
子はわざわいなるかな 燃える海水はわざわいなるかな」

20 白い世界

明 転

ツクーヨ

「(全裸で立ち ベッドに臥すアマーテに) 抱いて アマーテ あなたから離れられないわ いま わたしを抱いて アマーテ! それで すべてが解決する(泣く) ああ このままでは わたし 発狂する アマーテ 聴いているの? 聴いちゃあいないのね アルコールちゃんという名の売春婦とひとつ寢床でおねんねちゃんなのね じゃあ わたし そのすきにつけこんで あなたに けっして聴かせることのできない告白を さも 聴かせるかのように話すわ(泣いて) アマーテ あなたが悪いのよ あなたが政治家としての政務つまりポリティカル・ビジネスと 好色な浮気男としての性務つまりセクシャル・ビジネスの両方にとってもご多忙で いつもわたしをひとりぼっちにしておくものですから わたし つい さびしさのあまり 泥酔して帰った息子のムナージを抱いてしまったのよ(泣く) それと知った息子のムナージは 苦しみも束の間 いまでは すすんで泥酔し 母と子の慈愛の床を あられもない快楽の液だけがしている(絶叫し) アマーテ あなたが悪いのよ わたしが異常につよい性欲の持ち主と知っていて あるいは それ故に わたしに孤閨を守らせる(泣く) アマーテ あなたがこの地獄の演出家よ(髪をかきむしり) ああ このままでは わたしも 息子も そして あなたも 破滅する(駈けよって アマーテの上に身を投げ) 抱いて アマーテ 最後のチャンスよ」

アマーテ

「(泥酔のまま 寝言で) ウズーメ」

ツクーヨ

「(とびすさり 髪をひきむしって 狂乱し) ああ もう終りだわ アマーテ 酔っぱらいのメタンガスクさい息だけならゆるみましょう……酔いぎめの意識という吸い取り紙にきれいさっぱり吸いとられればな

かったも同然なんだから（絶叫し）でも ウズーメの名を呼んだ今の寝言は 無意識の口からでただけに
いつ層 ゆるすことができないわ 酔いがさめるほど 無意識の口は いつ層奥ふかく ウズーメの名を
のみこんで けっして 吐きだしはしないでしようから（アマーテのベッドから後ずさりつつ）さような
ら アマーテ いちど愛したものの憎悪は 逆風の勢いだけに 愛さなかったものの千倍もはげしい 覚
悟するがいいわ アマーテ たったいまから わたしが あなたの この世でいちばん残酷な敵なのだか
らー」

溶暗

するどい横笛 宙を裂く

21 黄いろい世界

黄いろい光さしそめる

犬のあわれな吠え声

ブラス楽器の乱奏

黄いろい女たち走りで ツクーヨをとりまき 髪ふり乱して踊り狂い 口々に叫ぶ

「復讐だ」

復讐だ」

ブラスの不協和音ふりしきる

黄いろい光渦巻く

黄いろい女たち

「復讐だ」

復讐だ」

黄いろい光に赤い光まじりだし

アメーノの声

「ハッハッハッハッハ」

暗転

スポットの白光にうかびあがるタキーリ

じつと立ち 悲しくうたう

「みてよ おとうさん

夏の夕空の大气のふかさ

つめたい海の光のこわさ

それらを

おとうさんがみなければ

それらは

わたしにもみえないの

ねえ

おとうさん

みてよ

雲も……小鳥も……道路工夫も

そうすれば

わたしにもみえるようになるのです」

暗転

22 白い世界

明転

アマーテ

「背広姿で受話器をおき」 ふん 北の実力者クニノはおろか 南の実力者トヨーク はては 西の実力者ウヒーヂ 東の実力者ツイークにいたるまで 国中の力あるものたちが 俺の国家元首実現に協力をおしまぬと 電話で約束してくれた（とりまく信奉者たちに） おお 俺の忠実な信奉者諸君 不思議ではないか かつては すきあらば俺の骨の髄にまでも噛みついてきた豹やジャッカルまでが いまは 寧丸をひっこぬかれたノミのようにおとなしい こいつあおかしい まるで世界全体がコンピュータ仕掛けの精巧な罠に化けてでもしたかのように こう うつとりと 目を閉じているのだからなあ」

信奉者1

「いや 総理 世界中があなたの偉大さの罠におちたのです」

アマーテ

「ふうん 信じていいのかね」

信奉者2

「この幸運を信じないものは 地面がけつして足の裏の上にくることはないのを信じないのと同じです」

アマーテ

「でも わるい奴の足の裏は 地底の方から地面にくっついているというぞ」

スサーノ

「(たまりかね) 総理 あなたを国家元首に仰いでさあ この国の暗あゝい地平線を キラキラっと こお銀いろの曙の光のハンマーで とってんかーんとさあ 打ち鍛えなおそうとしている全国の支持者の気持ちさあ ざらざらっと 逆撫でなんぞおしねえ方がいいんじゃないかなあ」

アマーテ

「スサーノ第一書記官 君の忠誠心は闇路を照らす月光のようにすがすがしい 感謝しているよ(信奉者に) また 君ら熱心な信奉者には心の井戸のいちばん深い底から汲みあげた誠意の水をお礼の言葉とさせていただこう(頭をふって) だが どうも 臭い どこからか ぷんぷん 鉄の匂いがしてくる 巧妙すぎるほど巧妙にしくまれた罠の匂いが……」

スサーノ

「(腕時計をみ) おつ 総理 時間ですぜえ この国の首都の広場にゃ 全国から あなたの信奉者や支持者の大群がさあ それっこそお 甘い砂糖のかけらにたかる蟻のように もぞもぞおっと集結しつつあるんでさあ 国家元首候補アマーテの一世一代の大演説を 耳の穴ほじくって とつくり 拝聴しようってんでえ」

アマーテ

「(一瞬ちゅうちよし やがて 決然と) よし でかけよう 首都の広場へ『現在』という波止場に立ってみれば『未来』は そらおそろしい海の遠望だが カチツと時計の針がまわる次の一瞬には その『未来』の海も『現在』の波止場になってしまうのだ」

アマーテと信奉者たち去る

アマーテ

「(戻ってきて) スサーノ第一書記官 君は行かないのかね？」

スサーノ

「ご本尊が ぴんぴんとしているっちゅうのにさあ 影武者たるわたしがでていくこつたありませんぜえ
それよつかあ ここで電話にかじりつきになつてさあ 川の浅瀬とか水たまりですくい残った雑魚を
電話作戦の網でひよいひよいすくつて 総理アマーテの国家元首候補選のため 一票でもかつさつた方
が得策でさあ」

アマーテ

「かわいい奴 留守はまかせよう(去る)」

スサーノ

「(ひとりになつて) ウエツヘウエツヘウエツヘ あけてびつくら 首都の広場の玉手箱ー カラッポカラ
ケツのしろい煙がゆらゆらゆらーっと立ちのぼり 人っこ一人いやしねえの おっとおどろきさんしょの
木つたあ このことよ フッフッフッフッフ 大馬鹿野郎のアマーテの奴めえ 裏切りのしろ煙にいぶ
されて おっと大変一大事だ がそのときあ すでに しらがよぼ落胆がつくりのおいぼれじさまに
早がわりー あすに迫つた国家元首候補選は アマーテ野郎の野辺の送りに早がわりー ウエツヘウエツ
ヘウエツヘ

だがここで手をぬいちゃあ もとのもくあみ雨もれタツタチ
手負いの鹿も同然のアマーテを 死の断崖まで追いつめるにや もうひと声ふた声の地獄囃子をうたわに
やならねえ」

溶暗

するどく鳴る横笛

23 赤い世界

赤い光はげしくめざめる

とおくから 馬の蹄の音 いなき 鼻嵐がちかづく

赤い女たち 剣をふりかざして踊り入り

中央に樽をすえる

全裸のウズーメ 樽の上にかかけのぼって 扇情的に踊る

赤い女たち スサーノをとらえ 衣服をはぎとって 樽の上に追いあげる

赤い女たち

「交われスサーノ

交われウズーメ」

ふたりははげしく抱きあい ゆれ動き 踊る

ウズーメ

「スサーノ 第一書記官ちゃん あなたのいうとおりに アマーテ総理を誘惑し 彼の情事の歴史に花を

そえてやったわ」

スサーノ

「三九で蟻サンキユーが十じとおやあなくつて 十二とおにだから 十二分じゅうにぶんの感謝をば捧げまつるよ ウズーメちゃん」

ウズーメ

「言葉でしめす感謝は空鉄砲よ」

スサーノ

「おっとどっこい わかってまさあのおまさちゃん 銭は あした 銀行にチャリインとお振りこみとござ
あい」

ウズーメ

「ありがとう スサーノちゃん で もちろん六千万？」

スサーノ

「うんにゃ てつとりばやくは 三千万のお振りこみい」

ウズーメ

「まだ なにか 条件があるの？」

スサーノ

「プロローグはエピソードにあらすでさあ 序曲で はい さいならば 入場料はらった聴衆に 失敬でござる」

ウズーメ

「陰謀家の目って 子狐のようにかわいいのねえ おっしゃってよ スサーノちゃん」

スサーノ

「もういちどアマーテ総理を誘惑するんじゃ」

ウズーメ

「今度はバックでいこうかしら……それとも ヒキウスで？」

スサーノ

「ふん 並みの女らしく 生まれつつきの売春婦だあ けどなあ ウズーメちゃん もっと高等戦術 水攻め兵糧攻めったあ これいかに」

ウズーメ

「で どうすれあいいのさあ」

スサーノ

「奴を 性的昂奮の嵐の頂天へとほらして さあ 梯子をはずせえ……つてのあどうだ」

ウズーメ

「わかったわあ つまりい セックスのおあずけねえ ホッホッホッホ いかにも あなたのような臆病な
悪漢のおもいつきね でも スサーノちゃん あおずけくうのは こちらもおんなじよ」

スサーノ

「(ウズーメをつよく抱きしめ ゆれうごき) そのすぐあとで この俺様が こんな具合に とどめの一発
でさあ」

ウズーメ

「あああああ(快樂の声をあげる)」

やがて 二人 快樂の絶頂に達していく

赤い女たち 二人をとりまいて 官能的に踊りまわる

急速に溶暗

とおくをはしり去る蹄の音 馬のいななき

24 黒い世界

暗黒

スポットの白光にうかびあがる旅法師

琵琶をかき鳴らし うたい語る

「宇宙にくらい穴があく ブラックホール 我執の星が死んで 暗黒のトンネルに生まれかわる 暗黒の口
星々のかけらと光を吸いこみ 光よりもすばやいスピードの舌でしゃぶりまわす 悪魔の口
太陽も やがては 死ぬ 太陽も巨大な腐ったトマトになる 太陽系いっぱいにくらみあがった太陽の
腐乱死体が 地球をのみほし 一億度の熱にぬれた悪魔の口になる ブラックホール
拳ほどの大きさの口に 太陽の全重量をほおぼる貪欲の口 みえざる光のひげにおおわれた恐怖の口
すべてが吸いこまれ 宇宙がむさぼられ われらは消滅する ブラックホール」

25 白い世界

明転

タキリー

「(ひとりで虚空に蝶を追い) 蝶さん 蝶さん 風に光の筋をひいて どこへいくの きつと わたしのお
とうさんのかくれている草むらにとんでいくのかわ ねえ 蝶さん おしえてよ わたしのおとうさんの
居所を」

スサーノ

「(背後からそつとあらわれ、いきなり 抱きすくめ) わたしがおしえてあげますぜえ タキリーお嬢さあ
ん (強引に接吻する)」

タキリー

「(絶叫して) 蝶が死ぬう! わああ (叫び ふりほどいて逃げ去る)」
スサーノ

「一寸追いかけてやがて あきらめ）畜生奴 足のはええアマだあ いっそ はしって 地獄へ落ちやがれえ」

ツクーヨ

「（あらわれ）スサーノ いまの叫び声は娘のタキーンじゃあなくなつて？」

スサーノ

「へん 息子のムナージの後は追っかけねえんですかい」

ツクーヨ

「（一瞬ショックをうけ やがて冷静に）母親というものは 産みの娘に 母親じしんの悔恨にあふれた過去をみているものなのよ」

スサーノ

「じゃあ 母親ちゅうもんは 産みの息子にさあ 母親じしんのふしだらな未来像をうつしみているんじゃない あねえんですかい」

ツクーヨ

「子どもは父と母からうまれでるのだから 母親ばかりを責めるのは片手落ちというものだわ」

スサーノ

「責める？ ふうん そいつあ 逆説的なある愛情の告白とかいいますぜ ツクーヨ奥さん（突然弱気の風情で）いやさ わたしがいいてえのは 息子さんのムナージはびんぴんかってことなんで」

ツクーヨ

「それやあ エル・チチョン火山がたつたいまべつと吐き出した火山弾のように 熱くつて ぶんぶんよでも どうして？」

スサーノ

「つまりい 総理アマーテの第一書記官たるに大いにふさわしい 火の玉のような情熱 種馬のような精力 のもち主つてえわけですなあ」

ツクーヨ

「(スサーノに詰めよって) あなた なにをいいたいの？」

スサーノ

「(絶望的に) ああああ つかれてしまったあ はじめは何万トンの巨船を岸壁にもやいしたロープだつて え 使いふるして毛ばだてあ 首吊りの用だつてなさなくならあな」

ツクーヨ

「(身をのりだし) あなた ひよつとして？」

スサーノ

「どうか 総理夫人 おつてえ下せえよ 総理アマーテにさあ つまり 使い古しのぼろ切れ縄よりあ ま だ縄になわれてもいいねえ ぶーんと薰りたけえ藁の方をえらぶべきだつてねえ」

ツクーヨ

「つまり 第一書記官の役を 息子のムナージとかわりたいっていうの？」

スサーノ

「さすがは聰明なる総理夫人だあ」

ツクーヨ

「で あなたはどうするの？」

スサーノ

「わたし？ ヘッヘッヘッヘ さしずめですなあ かくれもなき美の女神ヴィーナスのあすこの毛の数をば
ですなあ 一本一本 きつちりと まちげえなく勘定し そいつでえ 学位論文なんぞをいただこうつて
えんですがなあ」

ツクーヨ

「お似合いよ でも なぜアマーテをみすてるの？」

スサーノ

「あのお方ときちやあ まさしく高峰エベレストちゆうわけでさあ まあ おしなべて 偉大なお方のまわ
りときたら とつてもとつても 酸素がうすつぺらのスッカスカつてえなもんで つい わたしのような
べつたらこい平地にべつたべた這いつくばってえいなさるなめくじらみてえなしろものにとっちゃあ ち
つとおばかりい 息が切れるんでさあ」

ツクーヨ

「神経性高山病ってわけね でも アマーテに伝えてはみるわ」

溶暗

鼓の音すすり泣く

26 黄いろい世界

黄いろい光さしそめる

犬のあわれっぽい吠え声

ブラス楽器の乱奏

ツクーヨ

「ハハハハハ おもしろくなってきたわ 夫のアマーテは いまや スサーノの操つり人形 スサーノの指の動きがとまれば アマーテの手足はぴたりと動きをとめる そうなのよ 偉大な思想の持ち主ほど じぶんの靴の紐すらむすべやしない さあ 復讐にはもってこいのチャンスだわ アマーテからスサーノをひきはなせば アマーテの手足は ばらばらに千切れて胴体からはなれさり 彼は 政治上のいざりになる そこで えたりとばかり 息子のムナージを第一書記官に送りこみ わたしはロボットの遠隔操作室で この国をおもいのままに操縦するのだわ ハハハハハ」

黄いろい光に赤い光まじりだし

アメーノの声

「(ツクーヨの笑いにかさなつて) ハッハッハッハッハ」

暗転

27 黒い世界

スポットの白光にうかびあがるタキーリ
すすり泣いてうたう (ギターの伴奏で)

「唇が

胸の赤いコマドリののように

わたしの顔をとびたつて

空へ去っていく

なぜなの?

目も……鼻も……耳も

みんな

青や白や黄いろい小鳥のように

わたしの顔からとびたつて

どこかしらない国へ去っていく

なぜなの？

もう わたし

話すことも みることも 聞くこともできなくなりそうよ

おとうさん」

暗転

28 白い世界

明転

ツクーヨ

「まあ ヒーノ わたしの親衛隊 あなたを 宵の明星のカンテラで探していたのよ」

ヒーノ

「奥さま わたしたちは あなたの忠実な衛星です 主の星のいいつけなら あるじ なんでも 引力とおなじにう

け入れます」

ツクーヨ

「ありがとう ヒーノ でも 星座の平和な配列を乱すものがあるわ」

ヒーノ

「そいつは一体全体どこのどいつで？ ツクーヨ様」

ツクーヨ

「わたしの口はためらっているわ」

ヒーノ

「じゃあ こっちの口から申しましょう アマーテの第一書記官スサーノですな」

ツクーヨ

「彼は時限発火装置つきの爆弾よ 一刻もはやく アマーテのそばから追っばらわなくっちゃあ……」

ヒーノ

「奴は アマーテの心からの信頼をいいことに アマーテの皮を食い破って 肉ばかりか 骨の髄にまでも入りこんで いまや 生殺与奪の権を握りつつあります 奴を アマーテの肉体という汽車の窓から ぽーいと 缶ビールの空カンのように 投げすてちまうんですな」

ツクーヨ

「鉄道線路の上におかれた危険な石はとり除くのがいちばんよ」

ヒーノ

「石ころも 怨みのエネルギーを吸いこめば 一触即発のダイナマイトに早変わりして 線路ごと 列車を破壊しないとも限りません」

ツクーヨ

「石ころのダイナマイト病を防ぐ特效薬がないかしら」

ヒーノ

「石ころを 線路わきの草むらから 宝石屋のショーウィンドーへうつすのです」

ツクーヨ

「石ころをダイヤモンド病にかからせるのね」

ヒーノ

「ちょうど 南の選挙区に欠員があります 彼を国会議員に推すのです 奴は すかさず アマーテの体の中から ペット 痰のように吐きだされ よろこびいさんで じぶんをダイヤモンドと思いこむ病人でい つばいの虚名のショーウインドーにじぶんをさらしにいきます」

ツクーヨ

「わたしの息子のムナージは アマーテの血をわけた息子でもあるのですから うまれた瞬間から すで に アマーテの第一書記官たるにふさわしい運命だったのだから」

ヒーノ

「結構ですなあ アマーテ総理の後継者養成は 今からでも早すぎはしません」

ツクーヨ

「(握手し) 心強い言葉だわ ヒーノ あなたが頼りよ」

ヒーノ

「ありがとうございます 主^{あるじ}の星のよろこびは 衛星たるわれらの輝やき さつそく アマーテに決断をせ まりましょう 港を襲う大津波のすばやさで」

ツクーヨ

「このお礼はきつとするわ ヒーノ」

ヒーノ去る

溶暗

横笛　　するどく宙を裂く
暗黒

29 黄いろい世界

黄いろい光さしそめる

犬のあわれな吠え声

ブラス楽器の乱奏

黄いろい女たち走りで　ツクーヨをとりまき　髪ふり乱し　踊り狂い　ツクーヨの衣服をはぎとる

黄いろい女たち

「ツクーヨ

ツクーヨ」

ツクーヨ

「(官能的に踊りつつ) いよいよ　わたしの時代だわ　ああ　乳房の電球に　ぽおっと　赤い火がともる
頭のランプに電気がいっぱい充満する　体中の裂け目という裂け目が　まっかに充血してふるえおののく
(唸って) 男が欲しいわ」

黄いろい女1

「アマーテがいるわ」

黄いろい女たち

「むかしは姉でいまは夫のアマーテがいるわ」
ツクーヨ

「(絶叫し) いやっ アマーテはいやよ」

黄いろい女2

「ムナージがいるわ」

黄いろい女たち

「息子のムナージがいるわ」

ツクーヨ

「(髪をかきむしって煩悶し) いやっ 息子との近親相姦は じぶんの 肉のササミを食うようで むかつくわ」

黄いろい女1

「スサーノがいる」

黄いろい女たち

「むかしは弟でいまは他人のスサーノがいるわ」

ツクーヨ

「(ほくそえみ) ふうん 肉はおろか骨の髄までも腐り切ったあの男を 官能のスープにしてしゃぶるのもわるくはないわ (突然 激情にかられ) ああ もう がまんできないわあ 息子のムナージといっしょに泥酔し わかわかしいあの肉体をわがものにしよう」

犬のエロティックな吠え声

バスチューバのコミカルな咆吼

黄いろい女たち踊り狂いつつ 全裸のムナージを乗せたベッドをひきずりだす

黄いろい女たち

「ムナージ ムナージ」

ムナージ

「(酒のグラスをあおり) 風が 桃いろの風が 床を 天井を ベッドのシーツを吹きぬけて ぼくは ますます いなくなる ああ ぼくはだれ? いっただれなんだ」

ツクーヨ

「(ベッドにのぼり ムナージにすりよって 酒をあおり) 風よ 腕も 胸も 腿の筋肉も 足の爪も みんな かつての無とやがてくる無の両齒の櫛できれいにくしけずられている あなたは 風よ」

母と子 グラスをすて 接吻し 抱きあう

黄いろい女たち

「背徳の犬 錯乱の犬 塩酸キニーネの犬 糞尿の犬 滅びの犬」

ツクーヨ

「(ムナージの上に騎乗位となり 絶叫して) ああああ 気持ちがいい ああああ 気が狂う アメーノ わたしの神 どうか お救い下さい この 呪われた快樂の淵から 溺死寸前のわたしと息子を！」

急速に溶暗

赤い光さしそめる

蹄の音 馬のいななき 鼻嵐すばやく接近

ざあざあと降りしきる閃光

噴きあがる火柱

とどろきわたる爆発音

赤ぐろい噴煙みるみる視界をさえぎる

赤い肉の馬あらわれ 逃げまどう黄いろい女たちをじゅうりんする

剣をふりがざして赤い女たちあらわれ 黄いろい女たちを追いはらい

ベッドのまわりを踊る

アメーノの声

「ハッハッハッハッハ わしを呼んだのか ツクーヨ」

ツクーヨ

「(ムナージの上にまたがったまま) はい アメーノ」

アメーノの声

「夫のアマーテを棄て わしにつき従う決心がついたのか」

ツクーヨ

「はい アメーノ」

アメーノの声

「誓うか」

ツクーヨ

「命にかけて」

アメーノの声

「ふん 女の口からでる言葉は陽炎というが おまえの命の重みがかかっている陽炎なら すこしは重心もあろう」

ツクーヨ

「ありがとうございます」

アメーノの声

「言葉は咲きたての花 行動は花の散ったあとにみえる実 さいごの誠は 花ではなく実でしめすもの」
ツクーヨ

「でも 口にからいナンバンの実も実ですし 固くって齒のたたない椰子の実も実ですわ」
アメーノの声

「ふん ザナーキにしたがい ザナーキを支援し 彼の国家元首候補選の勝利に力をかすのだ」
ツクーヨ

「つまり もうひとりの国家元首候補アマーテを落選させるわけね」

アメーノの声

「アマーテの奴は この国でただ一人の 公然とわしに刃向う 勇敢な男 死の覚悟はできていよう」
ツクーヨ

「夫のアマーテを殺せというの?」

アメーノの声

「それでおまえののぞみがかなうとしたら?」

ツクーヨ

「息子のムナージを一人前の政治家にしていだけますか」

アメーノの声

「おまえの息子で いまは おまえの情夫のムナージは わしのしつらえる時の階段を一段ずつ昇って ひ
とかどの政治家への道をあゆむことができよう ハッハッハッハッハ」

蹄の音 馬のいななき 鼻嵐たかまり

赤肉の馬 宙をはしり狂う

ツクーヨの声

「でも 夫殺しの罪は スサーノに着せてやるわ」

狂乱の音楽

踊り狂う赤い女たち

かけ去る馬の蹄の音 いなき 鼻嵐

溶暗

30 黒い世界

暗黒

スポットの白光にうかびあがる旅法師

琵琶をかき鳴らし うたい語る

「太陽が冷える 大気の熱が失せる 地球のオレンジに氷柱が下がる ふぶきの牙は自動車の咽喉笛を噛み切る 地球が冷える 水分は氷って石になり 血は凝り 緑はあせ 火は消える 太陽が冷える 風が蒼ざめる 偏西風の足なみが乱れ ときならぬ寒波が吠えたけり 人は冷え 人類は凍死する」

31 白い世界

明転

タキーリ

「目をつぶって アマーテの足にすがり）みえないわ おとうさん もう わたしの目も あなたの足も（泣いて）わたしたち みえないもの同士なの？ 世界って みることも みられることもないものたちのものなの？」

アマーテ

「（絶望のあまり 酒瓶をあおりつつ 酔いどれ）天よ 絶望のくらいつばさを煽る恐怖の鳥よ なぜなのだ 首都の広場には 餌を漁りまわる鳩の群れと 泥まみれの捨て犬しかいなかった おお 天よ これは どんな災厄の前兆か（笑って）だが 反面 すべては 筋書きどおりに運んでいるともいえる 俺を葬りさろうとしている暗黒の帝王アマーノのたくらみも また それ以上の残酷さで 俺じしんを暗殺しようとしている俺の完全犯罪も……」

タキリー

「（泣いて）嵐が吹きすさんでいるわ いや いまは おとうさんが 嵐そのものなの？ ああああ かわいそうなおとうさん 苦しみのギターなら もう爪弾かなくってもいいのよ おとうさん」

アマーテ

「（酒をあおり）この世でいちばん残酷な殺人……それは おそらく けっしてじぶんにはあらがったり逃げまわったりすることのないじぶんじしんを じぶんの手で ゆつくりとくびり殺すことじゃあないのか（泣く）天よ 絶望のくらい焰をよびさます フイゴよ 人は 美とか真実とか善などという じぶんの意識の壁にゆきあたりばったり落書きしたにすぎない幻影に いつのまにか心を奪われ ついにはすっかり支配されてしまう 病的なイキモノなのか（ふと タキリーに気づき 抱きあげ）おお タキリー 白痴の娘 どうして ここにいるの？」

タキリー

「(目を閉じたまま) わたしは もう どこにもいはしないわ おとうさん」

アマーテ

「ああ くるしい スサーノをよほう あの男なら 生きているということ自体のもつ烈しい毒性をうすめる機転の水をもつていよう」

タキリー

「(おびえて) こわいわ おとうさん 光のない部屋にじぶんの影を呼びだしたりしてはいけないわ」

アマーテ

「(叫ぶ) おーい スサーノ第一書記官！」

スサーノ

「(ほくそえんであらわれ) おや 総理 うつくしいお嬢さんとごいつしよで」

タキリー

「(アマーテのかげにかくれ) こわいわ おとし穴が口をきいているみたいで おそろしいわ」

スサーノ

「フワッフワッフワッフワ お嬢さん でもねえ いつか きっと この わたしが 大好きになります

ぜ」

アマーテ

「(スサーノの手をとり) スサーノ 本当に地球はまわっているのだろうか」

スサーノ

「総理 酒はほどほどがいいですぜえ 百薬の長も 度をこせあ 人を滅ぼす気ちげえ水でさあ」

アマーテ

「泣いて」酒が俺を滅ぼすまえに 奴らが俺を滅ぼすだろう」

スサーノ

「驚いて」え いったえ だれが？」

アマーテ

「北の実力者クニーノ 南の実力者トヨークが 俺を裏切ったのだ」

スサーノ

「へええ じゃあ 総理の金をうけとった連中が みんなですかい」

アマーテ

「そうなのだ 東の実力者ツイーク 西の実力者ウヒーヂもなのだ」

スサーノ

「へええ おっとおどろきさんしょの木ったあこのことだあ」

アマーテ

「電話では甘い言葉で支援を約束した連中が 実際の行動には苦い寝返りの毒をしこんでいたのだ」

スサーノ

「信じられんなあ じゃあ 首都の広場にゃあ……」

アマーテ

「だだっぴろい広場の鏡に まっさおな空がむなしくうつっていたよ」

スサーノ

「じゃあ ああ 最大の実力者サターナの野郎も？」

アマーテ

「髪の毛一本だってあらわしはしなかった」

スサーノ

「(大仰に) おおおおお なんたる背信!」

アマーテ

「(酒の瓶を投げすて) しかし あるいは すべて 俺のたくらみなのかもしれぬ」

スサーノ

「えっ?」

アマーテ

「なぜ 地球上の六十億人が もぞもぞと好色なゴキブリのように繁殖して 大地をほう大な糞尿でよごし 大気を悪臭ぶんぷんのゲップでけがし パンを食いちらし 地面に穴をうがって地下水を飲みほすのか いや 他人を裁く権利など この俺に爪の垢ほどもありゃしない

どうして 海底の液体がダイヤモンドともいうべき石油をすいあげてはオシッコのように地上に垂れながし むすうの核弾頭ミサイルは世界中の男たちを性的不能者にしてしまう勢いで天に勃起し 政治家は地下室の芋のように腐ってふやけ 選挙民は無為と無関心の麻薬を吸ってねむりこけるのか(天に手をのべ) 俺なのだ 他人を責め 裁き 非難するという 死肉をくらうコンドルのような悪習に首までどっぷり漬かっている俺がすべての元凶だ」

タキーリ

「(アマーテの背にとりすがったまま) やめて おとうさん 海をよぶのはやめて 水が盛りあがって 大きな死の崖となって こっちにむかってくるわ 崖があるいてくるわ やめて おとうさん」

アマーテ

「(りよう手でじぶんの首をしめ) これ こうして 世界中のむすうの人々の二本ずつの手が 俺の二本の手にはいりこみ ずつしりと重い指の動きで 蛇のようにしつように俺の首をしめあげ 息の根をとめようとしている……」

タキーリ

「(絶叫し) やめて おとうさん 水の崖がくず折れてくるう!」

スサーノ

「あの二枚舌の実力者どもに もういっぺん 電話をしてみちやいかがで?」

アマーテ

「じぶん殺しの舞台の主役はこの俺で奴らは端役 だから 奴らが俺の運命をきめる前に 俺が俺じんの運命をきめねばならぬ」

スサーノ

「じゃあ あすの国家元首候補選までは なんにもしねえってわけなんで?」

アマーテ

「いや じぶん殺しの美酒を飲もう」

タキーリ

「(絶叫し) 水の崖が おとうさんの口の中にはいっていくわ!」

スサーノ

「酒は体のうちがわを焼いて魂まで黒焦げにしちまわあ

ウズーメをよびましょう エロスの女を」

アマーテ

「肉欲の酒が 俺の自己処刑のための毒の服か ふん しかし 死の恐怖をぬぐい去ってくれるもんなら
なんだってがぶ飲みしよう」

急速に溶暗

横笛のするどい絶叫

タキーリ

「(絶叫し) おとうさんが水の崖になっていくう！」

暗転

32 赤い世界

暗黒

遠くから急速に近づく蹄の音 馬のいななき 鼻嵐

赤い光じわじわとはん乱

アメーノの不気味な笑い声

赤い女たち 剣をふりかざしてあらわれ 樽をすえ 踊り狂う

全裸のウズーメ 樽にかけのほり 踊り狂う

赤い女たち アマーテを全裸にし ウズーメの方に押しやる

ウズーメ 踊りつつ アマーテを抱くが 触れようとするアマーテの唇を巧みに避け 腕をふりほどこい

て逃げる

赤い女たち 手をうち 哄笑し はやしたてる

必死にウズーメを追うアマーテ

ウズーメ とらえられる寸前で巧みに逃げる

いつ層はやしたてる赤い女たち

アマーテがウズーメをとらえると 赤い女たち 中に割ってはいって妨げる

ついにアマーテ絶望し うち伏して泣く

はしり去る赤い女たちとウズーメ

遠のいていく馬の蹄の音 いなき 鼻嵐

アメーノの声

「ハッハッハッハッハ」

溶暗

33 黒い世界

暗黒

スポットの白光にうかびあがる旅法師

琵琶をかき鳴らし うたい語る

「太陽がペストにかかる 黒点がふえ 黄金の顔がかわき 精神がくろずむ 太陽が黒死病にかかる 悪魔の熱がはしり 病熱がうみ 目がくらむ ペストの太陽の吐きだす光の唾で地球もペストに犯される 地は乾いてひび割れ 引力はたわみ 大気は動てんし 人はひずむ 火のマグマがうずき 地球は溶解する」

34 白い世界

明 転

アマーテ

「(乱れた背広姿で酒瓶をあおり) 世界中が尻尾をまいて俺から逃げていく いや 犬のように逃げだしたのはこっちの方か」

ツクーヨ

「(妖艶な姿をあらわし) 気のはやい祝盃ぶりね」

アマーテ

「(ツクーヨににじり寄り) ツクーヨ 黒百合のようにうつくしいよ」

ツクーヨ

「(婉曲に身をかわし) わたしの愛はもう燃えつきた蠟燭だわ」

アマーテ

「(追いつが) 苦しいのだ 妻よ 子羊よりもあわれなこの俺を ふくよかな胸の草原にかくまっておくれ」

ツクーヨ

「(冷然と) 苦しみはいつも苦しむ本人だけのもので けっして家邸のように他人に譲りわたしなどできないわ」

アマーテ

「お願いだ ツクーヨ (抱きしめようとする)」

ツクーヨ

「(強くふりはらい) あなたの妻としてのわたしは あなたのひとことで ものの見事に処刑されてしまっ

た いま ここにいるのは あなたのいちばん手ごわい敵ツクーヨよ」

アマーテ

「(泣いて) おお 世界が 齒をむきだし 俺に噛みついてくる……まるで 気の狂った鰐のように」

ツクーヨ

「(向きなおり) でも 愛は まだ 死に切ってはいないわ」

アマーテ

「瀕死の白鳥は蟲の息か」

ツクーヨ

「第一書記官スサーノを追放し その後 ムナージを入れていただいたら わたしの愛は 息をふきかえすわ」

アマーテ

「(手で顔をおおい) 俺の右の目はスサーノの左の目と対になってはじめて像をむすび 俺の左の耳はスサーノの右の耳と対になって はじめて 音をとらえる (突然 ツクーヨの足元にひざまずいて手をつき)

ツクーヨ そればかりは勘弁してくれ」

ツクーヨ

「(冷然と) じゃあ やっぱり わたしを愛してはいないのね

瀕死の白鳥もこれでおだぶつだわ」

溶暗

尺八のするどい音

暗転

35 青い世界

狼の吠え声遠のく

青い光力なく萌える

青い女たち 鏡をふりかざし 声もなく遠くをすぎる

アマーテ ひとり立ち 手を空にのべて絶望する

狼の声しだいに犬のあわれな声にかわり

青い光も黄いろい光にかわる

アマーテ

「絶望だ 狼が犬にかわっていく」

溶暗

鼓の音 虚空を打つ

36 白い世界

ヒーノ

「総理 ご機嫌はいかが?」

アマーテ

「(酒瓶をさしだし) やあ ツクーヨの親衛隊のヒーノ これ この通り 酒瓶の中は 風速ゼロの大風ぎ

さ」

ヒーノ

「国家元首候補選もあすに迫りましたなあ」

アマーテ

「ふん 選挙は かたちのないギロチンさ」

ヒーノ

「え？」

アマーテ

「大多数者という残酷な刃がストーンと落っこちてきて 生身の人間の首が 胴体からスパッと切りはなされ 首なしの胴体だけが ゆらりゆらり 権力の街道を浮かれあるくのさ」

ヒーノ

「ということは？」

アマーテ

「国中が 裏切り者の臭い息でむんむんする」

ヒーノ

「して 裏切りの張本人は？」

アマーテ

「さしずめ この俺かな」

ヒーノ

「スサーノです あなたの第一書記官のスサーノです」

アマーテ

「俺は奴を信じているのだ」

ヒーノ

「その信頼の厚さが そのまま 奴の陰謀の毒をかくす壺の厚さです」

アマーテ

「中傷はブーメラン 他者を傷つけたつもりが結局はじぶんに戻って傷をつける だが いちばん毒性のつよい中傷も 耳には甘い蜜のしたたりで みんなが ついつい 聴く気になるものだ」

ヒーノ

「スサーノを 一刻もはやく 総理のそばから遠去けるべきです」

アマーテ

「俺とスサーノとのあいだの距離がのびるほど 互いのひきあう力はつよまるだけだ」

ヒーノ

「ちょうど 南の選挙区に欠員があります スサーノを国会議員に推すのです」

アマーテ

「そして スサーノの後釜には息子のムナージをか よめたぞ 三文芝居の筋書きが……」

ヒーノ

「夫と妻は 光と影……昼と夜……たがいに関手をうつしあう 二枚でありながら一枚の鏡 総理 あなた
の考えは奥さんの考えで 奥さんの利益はあなたの利益です」

アマーテ

「（絶叫して）スサーノは俺じしんもおなじ いや 俺よりもっと俺じしん たとえ 俺が俺じしんを殺す
ときでも スサーノだけは手放さんぞ」

溶暗

横笛するどく宙を裂く

暗転

37 青い世界

遠くかすかな狼の吠え声

青い光うすく萌える

青い女たち 鏡をもつ手を垂れ 地平線へと去る

アマーテ

「(狼の声の方へと両手をのべ) 狼よ 吠えろ さもないと 俺は 心底卑劣な犬になるのほかないのだ…
…ポリーヌに」

狼の声しだいに犬のあわれな声にかわり

青い光が黄いろい光に変化する

とつぜん 手に玉をふりかざす黄いろい女たちあらわれ 踊り狂いつつ

「ポリーヌ

ポリーヌ」

溶暗

尺八の音宙をはしる

38 白い世界

明転

アマーテ

「(スサーノの足もとにすがり) スサーノ 俺の最後の砦はおまえ ゆめゆめ 得体の知れない奴のために扉の門をはずしたりしないでくれ 暗黒の帝王アマーノとの闘いはいまやつと序曲を奏し終えたばかりなのだ」

スサーノ

「(アマーテをふりはらい) なにをおっしゃるので 総理 いつだって 私あ あなたが地面におつことした影のようなもんでさあ あなたが栄光の太陽に面とむかつて立つほど 土の上にくつきりとはずかしい 暗闇の汁をこぼす影でさあ」

アマーテ

「誓ってくれ スサーノ おまえだけは 絶対に 俺を裏切ったりはしないと……」

スサーノ

「まあねえ わたしの中に虱のうぶ毛ほどの寝返りの心でもありゃあ それをうち消すために誓いもしました ようがねえ いまのわたしには その必要もねえんでさあ」

アマーテ

「(立ち上がり) ありがとう スサーノ (抱きしめる)」

スサーノ

「(アマーテをふりほどき) やめてよ 総理 ホモとまちがえられますぜえ」

アマーテ

「(スサーノにとりすがり) おまえが好きだよ スサーノ」

スサーノ

「(はげしくつきはなし) なにをいうんで 総理 この国の歴史がけがれまさあ」
アマーテ

「(なおもとりすがり) すべての男は女の一部分として女からうまれでる 男と男が愛しあうのも 男と女が愛しあうのとおなじに 共通の母としての女の子宮にかえるための儀式じゃあないか」

スサーノ

「(はらいのけつつ) そいつあ とつても高くつく儀式でさあ」

アマーテ

「言ってくれスサーノ」

スサーノ

「(冷静に) ともあれ あすの国家元首候補選の結果をみてからでさあ」

アマーテ

「(絶望し) あああああ(泣く)」

溶暗

鼓の音 宙を切る

39 黒い世界

暗黒

スポットの白光にうかびあがるタキリー

かなしく唄う

「あなたのせいではないのに」

おとうさん

木が唾になつてしまったわ

石が盲になつて

小鳥はもう飛ぶ空がない

けっして

あなたのせいではないのに

おとうさん

野原の緑も 海の青も

だれかに盗まれてしまつて

わたしたち

じぶんじしんすら

もう

もつてはいない」

暗転

40 白い世界

明転

タキーリ

「(アマーテの後から両手で目をかくし) みちやあいけないわ おとうさん」

アマーテ

「（ふりはらって）しかし みなければならぬ」

タキーリ

「ああ だれかがやってくる けっして 聞いてはいけないわ おとうさん」

アマーテの支持者たち 血相かえて駈けこむ

アマーテの支持者1

「おお 総理！ なんとしたことか 国家元首候補選は ザナーキの圧勝です（泣く）」

アマーテ

「（冷静に）やあ 支持者諸君 勝ったのは ザナーキではなく アメーノだよ」

アマーテの支持者2

「（泣いて）前ぶれの風は 総理優勢のうれしいニュースを選びまわっておいしましたのに……」

スサーノ

「（泣いて）畜生奴 総理アマーテを支持するとさあ 口からのでまかせぞろぬかしやがって ちゃあんと金まで受けとりやがって そいつをば じつは アマーテおろしの実弾にすりかえやがった 破廉恥な奴らが 国中にごしゃまんといやあがったのだ」

アマーテ

「ありがとう 諸君の俺に対する好意と忠誠の言葉こそは 俺のうけた傷口へのなよりの薬……いつわり多いこの世の汚辱をすすぐ君らの心こそ こんこんと湧きでる天の湧き水……それを確かめただけでも このたびの候補選には大きな意味があったといわねばなるまい」

アマーテの支持者1

「（アマーテにとりすがって）こんなすばらしい人物を この国は拒否し かわりに 虚偽と策謀と術策の

ザナークをこの国は選んでしまった」

スサーノ

「光よりは闇……善政よりは圧政……希望よりは絶望をさあ この国の連中はえらんじまったあ」

アマーテ

「狼の野性が敗れさり 赤むけの肉から血をふりこぼして飛ぶ災厄の馬が勝ったのだ 暗黒の馬……権力の馬……破滅の馬が またも勝ちどきをあげ この国の秤は またも ぐらりと 没落の地平へと傾いたのだ おお 世界よ おまえまでが じぶん殺しの美学に酔いしれ おのれの指をおのれの咽喉にかけようとする……」

溶暗

低く不気味に連打されるドラム

暗転

41 赤い世界

急速に近づく蹄の音 馬のいななき 鼻風

アメーノの不気味な笑い声

荒れ狂う赤い光

はげしく噴きあがる火柱

とどろく爆発音

赤黒い噴雲

それをつき破って空をはしる赤肉の馬

赤い女たち 剣をふりかざしてあらわれ アマーテをとりかこみ 喚声をあげ 剣で威嚇する
赤い女たち

「ポリーヌ

ポリーヌ」

アメーノの声

「ハッハッハッハッハ」

アマーテ

「（必死に）やい アメーノ 姿をあらわせ！」

アメーノ

「ハッハッハッハッハ 弱い犬ほどよく吠える

おまえは この国の総理の座から蹴落とされる

わしにさからうものの末路じゃ

ハッハッハッハッハ」

アマーテ

「畜生奴 この国の元首でもないおまえが この国の運命をおもいのままに舵取りする なぜだ！」

アメーノの声

「ハッハッハッハッハ わしは元首の元首 わしは天 地のいきもののすべては わしの奴隷じゃ ハッハ

ッハッハッハ」

アマーテ

「悪魔奴！」

赤い女たちの喚声

「ポリーヌ

ポリーヌ」

虚空をかけずる赤肉の馬

とどろく爆発音

ひびきわたる蹄の音……馬のいななき……鼻嵐

うずまく赤黒い噴煙

赤い光の狂乱

乱舞する赤い女たち

溶暗

42 黒い世界

暗黒

スポットの白光にうかびあがる旅法師

琵琶をかき鳴らし うたい語る

「宇宙がひずむ 地球の回転速度が乱れる 宇宙がひずむ 氷の髪の毛が地球に接吻し 地軸が氷る 宇宙がひずむ 邪悪な時間の櫛が海流をくしけずり 星たちの光は折れ曲がる 宇宙がひずむ 砂漠の蛇が地表をのみほす 宇宙がひずむ 地球の口は熱い吐息をはき すべての水分は煮えたぎり 北極と南極の悪魔が踊りだして行方不明になる 宇宙がひずむ 都市が沈み 海底がもち上がり 巨大な天体のかけらが地球にぶつかって 人類は消滅する」

43 白い世界

明転

アマーテ

「(酒瓶をあおり 空にして投げすて) ああ 咽喉が焼ける 大気のぬめぬめした指が 真綿のように 俺の首をしめつける いや 大気の指こそが じつは 俺の指……じつとりと湿って 縄のようにしつこく 蛇のようになぐく俺の指の正体が 本ものの指からするりとぬけでて 俺の息の根をとめにやってくる だが この苦しさもメビウスの帯 ずーっと引かれていく線は いつしか 苦しみの裏側の快樂へのびていき 歓喜の花を咲かせる じぶん殺しの華麗な祭りはクライマックスに達し やがて 死のけいれんが訪れる……全生涯をかけてのオルガスムとしての死が」

スサーノ

「(息せききつてあらわれ) 総理!」

アマーテ

「(笑って) 総理アマーテは市民アマーテによって扼殺され 市民アマーテの死体は総理アマーテによって屍姦された ああ ネクロフィリアの花よ じぶんじしんの屍体に恋するこの俺こそは タナトフィリアの虹 滅亡愛の象徴さ ハッハッハッハッハ」

スサーノ

「(嘲笑し) それやあ わたしだって 死ちゅうもんが たった一度かぎりの極上の快樂だってえこったあ 知らぬわけじゃあござんせん

死ちゅうのは いわば おもわせぶりのブリッコの処女妻なんでさあ あの女の処女膜を びりびりっ

と破ろうとするものあ みいんな あの女に噛み殺されるんでさあ だがね アマーテ こちとらさんは
国家元首候補選の結果に いたく ご執着でさあ」

アマーテ

「(錯乱し) え 元首? なんだね そいつあ 馬の小便を蒸留してつくった極上の 原酒のことかね」

スサーノ

「裏切り者を許しちゃあなりませんぜえ」

アマーテ

「人は裏切るものをすら裏切るよ あるいは 人間の生とはおのれじしんへの裏切りなのだ」

スサーノ

「総理 このわたしをあなたの第一書記官から ぶつとりと 首切って 解任してくださいえよ そして 南
の選挙区から国会議員として立馬するのを認めくださいえよ わたしは 今よりはもっと強い立場で あ
なたの栄光を守り あなたを裏切る奴らに こう 正義の刃ふるって 復讐してみでえんで」

アマーテ

「(突然怒りたけり) 黙れ 裏切りものめ 俺の目 俺の耳 俺の手足の片一方をそっくり顔と胴体にくっ
つけたまま俺のそばから去るのはゆるさん(スサーノの足もとにひざまずき) お願いだ スサーノ もは
や おまえの半身となつてしまった俺をすてたりなどほしないでくれ(泣く)」

スサーノ

「(居丈高にふりはらい) もう沢山だ やい アマーテ じぶん殺しかいいう奇妙きてれつな脳梅毒にかか
りやがった化物奴 アルコールにどっぷり漬かったぶよぶよの魂を豚の睾丸のようにぶらさげて歩く犬
奴 いいか よつく聴け この俺様はなあ おめえの第一書記官としておめえのいちばんの身近かなとこ

ろで おめえの命を狙っている アメーノの手先なんだあ ハッハッハッハ 驚ろいたかあ 薄のろ

野郎 他人を信ずるってえのは政治家としての墮落だってことぐれえ 幼稚園でもおしえていらあな」

アマーテ

「じゃあ 元首候補選での裏切り劇も？」

スサーノ

「ふん この俺様の 高等政治戦術 ポリテック・テクニクのウルトラCって奴でさあ ザナーキ勝利のシナリオは この俺様が おめえの阿呆面みいみい 鉛筆なめなめ 書いたのさあ やい 聴いたかや
アマーテ アル中ぶくぶくの水死人め」

アマーテ（タキーリの声で）

「（狂乱し）ホホホホ わたし ほんとうは女なのよ ほおら（胸をはだけ）胸がしびれるように張ってくるわあ 乳房が発情の水を吸った丘のようにふくらんでくる 乳首がプツリと電気を帯びた芽のようにとんがってくる（笑って）お腹のどまん中をとつてもくらしい空洞感がいたちのように駆けぬけるわ 子宮という名の どすぐろく うつろな闇の世界が（しどけなく歩き）ああ わたし じつは 女なのよ（ひるむスサーノに）さあ いらつしゃいな スサーノちゃん わたしのかわいいかわいい弟 でもねえ わたしたち 姉と弟なんですけれど 結婚して 子どもをいっぱい産むのよ 女のわたしも 男のあなたも いっしょに おたがいの心の清らかさをしめしあうため とつてもさまざま子どもを産むのよ（スサーノの手をとり）あなたのキラキラ光る真珠母のような精をいただいて わたし だろどろ渦巻く疑惑の霧とか 青くけぶる猜疑の島とか つめたい逆心の水をうむのよ（うっとりとしてスサーノをみあげ）そして わたしのうす桃いろに光り輝やく精をうけたあなたは ギラギラした権力の穂とか 毛ばだつ征服の穀物とか 血にまみれた暴逆の少年をうむのよ ホッホッホッホッホ」

溶暗

横笛するどく宙を裂く

44 黒い世界

暗黒

スポットの白光にうかびあがる旅法師

琵琶をかき鳴らし うたい語る

「ひとりの男が じぶん殺しの猥褻な野望をなしとげ 屍しかばねの女になる 白痴の太陽になる」
暗転

45 青い世界

中空に青い太陽がのぼる

錯乱のアマーテ 両手を高く天にのべ 絶叫

「ただ一匹の狼の絶滅は 全世界の絶滅なのよ あああああ（タキーリの声で）」

青い女たち 鏡を垂れてあらわれ つぎつぎと 地に倒れ伏す

タキーリ

「（盲い 両手で前方をまさぐりつつ）みえないわ おとうさん もう 聞すらみえないわ おとうさん
目は もう 無すら みてはいないのね おとうさん」

溶暗

46 黄いろい世界

ブラス楽器 不気味に鳴る

喚声をあげてなだれこむ黄いろい女たち 光り輝やく玉をふりかざして踊り狂う

黄いろい光さしそめ

犬の卑しい鳴き声

青い太陽消滅し

黄いろい犬の太陽が空にうかぶ

ブラスの不協和音吠えたける

黄いろい女たち

「ポリーヌ

ポリーヌ」

黄いろい女たち アマーテをとりまき 衣服をはぎとり 口々に叫ぶ

「アマーテは女

アマーテは犬

アマーテはポリーヌ」

はげしいドラムの乱打

47 赤い世界

遠くから 蹄の音 馬のいななき 鼻嵐

赤い光さしそめる

アメーノの不気味な声

「ハッハッハッハッハ」

剣をふりかざす赤い女たち ツクーヨとムナージが全裸で抱きあうベッドをはこびこみ そのまわりで踊り狂う

ツクーヨ

「アマーテ 死ぬがいいわ いまは 息子のムナージが わたしの夫 わたし達 ふたりとも じつは ア
メーノの忠実な信奉者なのよ 今度の国家元首候補選でわたしたちが支持したのは けっして あなたで
はなかったのよ ホッホッホッホッホ アマーテは もはや 牙と爪をぬかれた狼 どんな犬よりも卑劣
な犬 政治的な犬 ポリーヌよ」

アマーテ（タキーリの声で）

「（錯乱して）ありがとう かつてはわたしの妻で いまはわたしの可愛い妹のツクーヨ 心からお礼をい
うわ」

ツクーヨ

「（ひややかに）とうとう気がふれたわ 魂の死だわ あとは 一気に 肉体の息の根をとめるだけ」

アメーノの声

「ハッハッハッハッハ」

たかまる蹄の音 馬のいななき 鼻風

赤い光の狂乱

踊り狂う赤い女たち

全裸のスサーノとウズーメ 抱きあってあらわれ 樽の上に立つ

スサーノ

「畜生 アマーテ奴 くたばりやがれえ てめえのいつもぬかしやがっているとおり 史上最高の優美なギロチンとしての「じぶん殺し」の美学を さあ いますぐ 実行してみろい じぶんじんのやわらかい指を こう ざりざりつと鉄の鑢で研いで 切れ味するどい刃物にしたて そいつで バサツと てめえの首を切りおとしやがれえ」

アマーテ（タキーリの声で）

「ホッホッホッホッホ どうとう わたしの勝ちだわ スサーノちゃん もう あきるほど 他人殺しの悪習にふけたあわれなホモ・サピエンスも 命運が尽きたわ（うたいだし）きょうからは 他人殺しにかわって じぶん殺しが いちばん崇高な思想になるのよ ホッホッホッホッホ」

アマーテ 空の高みへとのほりはじめる

黄いろい女たちと赤い女たち とりまいて喚声

赤い稲妻ひらめく

はげしい爆発音

たちのぼる火柱

猛烈に吹きだす赤黒い噴煙

そのかげに一時姿をかくすアマーテ

やがて 全裸のうつくしいタキーリとなってさらに空の高みへと 髪ふり乱して昇りつめていく

その頭上で爆発する純金の太陽

合唱団のうつくしい歌声おこる

「おのれの闇を殺すものだけが

おのれの光に到達できる

おお太陽

純金の太陽」

一瞬世界全体に照射される純金の光

黄いろい女たち 赤い女たち ツクーヨ ムナージ スサーノ ウズーメが タキーリとなったアマー

テへと いっせいに 手をのべる

「アマーテ！

アマーテ！

タキーリとなったアマーテ！」

うず巻く赤黒い噴煙

みるみる接近する馬の蹄の音 いなき 鼻嵐

アメーノの声

「（絶叫し）ええい 畜生奴！」

とどろく爆発音

たちのぼる火柱

赤肉の馬 巨大な姿をあらわし

赤く輝やく巨大なペニスで タキーリとなったアマーテを突き刺す

アマーテ（タキーリの声で）

「あああああ（絶叫）」

急激に暗転

タキーンとなったアマーテの悲鳴のみ エコーで しだいに遠のいていく

48 黒い世界

暗黒

スポットの白光にうかびあがる旅法師

琵琶をかき鳴らし うたい語る

「皮を逆さはぎされて赤い肉をむきだした巨大な馬の呪いのペニスが タキーンとなったアマーテを突き刺して殺す だが この 血まみれの馬のペニスは あなたの 血まみれの指ではないのか……あなたの首をしめ殺す あなたじしんの 血まみれの指ではないのか」

溶暗

暗黒

幕